

---

# 魔法少女リリカルなのは～Angel's singer

悠&ユウナ【Wユウ～】J N S

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Angel's singer

### 【Nコード】

N86500

### 【作者名】

悠&ユウナ【Wユウ】JNS

### 【あらすじ】

人気絶頂のグループ《セラフィナイト》のリーダー月神悠夜……  
彼が紡ぐ歌は人々に感動と共感を与えて来た……

そんな彼には本人にも知らない能力があった。

想いを歌に変える。

彼が世界にもたらすものとは一体何か……

彼はただ唄い続ける。

## プロローグ（前書き）

初めまして！！

この作品が処女作になります。

基本的に主人公が最強でハーレムになるかもしれませんが、うのが嫌いな人はお勧めしません。

駄文で自分の自己満足で書くので出来たら感想は甘めをお願いします（笑）

## ブローグ

「はい、オッケーです！ チェック入ります！」

スタジオ中に声が響く

『ふう………漸く休憩に入れるな………』

全く………俳優なんて俺の柄じゃないのにな………

「あつ！ 月神さん！ お疲れ様です！ 今日はこれで終わりだそうです！」

スタッフの1人が声をかけて来た。

『分かりました。では明日はCDの録音があるんでこれで失礼します』

「そうなんですか。お疲れ様です！…………あの娘がファンなんです。サインを頂いても宜しいですか？」

『構いませんよ。名前は何て言うんですか？』

「ありがとうございます！智代って言います！」

『智代さんですね？…………これで構いませんか？』

「はい！ありがとうございます！これで娘に喜んで貰える！！」

『そう言って貰えると俺も嬉しいです。娘さんに宜しくと伝えて下さい。では失礼します』

「はい！引き止めてしまっすいませんでした。お疲れ様でした！」

俺はスタッフや共演者に挨拶を済ませ楽屋に向かった

『全く……マネージャーは俺が音楽だけで行きたいのは知っててドラマのオフア―受けるなよ……』

俺は私服に着替えながら自分のマネージャーに対して愚痴る。

ここで軽く自己紹介しておこう。俺の名前は月神悠夜、今年で23歳になる。バンド『セラフィナイト』のボーカルとギターを担当する一応、リーダーだ。17歳の時にデビューして今年で5年……辛い事や悲しい事も沢山あったが今や俺達はトップに立った。だが……

『ふう……最近はどう仕事が増えたな……』

先程も収録したばかりのドラマに始まり、バラエティーにニュース番組、アニメの声優、来年の春には映画の主演も決まっている。

『人気があるのは有難いんだが、俺達の本業は歌手なんだ……』

他のメンバーもそれぞれ色々な番組に出演し人気を得て中々、新しい曲作りに入れない中でようやく新曲のレコーディング迄にこぎつけた。

『明日は久し振りの新曲だ。気分を変えて行くか……』

俺は着替え終わると駐車場に向かい愛車に乗り込む。

『ん？ あれは……』

ふと駐車場の隅に女の人がしゃがみ込んでいた。

俺は心配になり急いで車から降りて女性の所へ向かった。

『あの……どうしましたか？ 何処か具合でも悪いんですか？』

と声を掛けた。

すると女性は顔を上げた

『あれ……？ もしかして田宮さんですか？』



そう……その女性は以前、アニメの声優をした時に共演した事がある。

その時にはもう1人の共演者の水城さんと一緒に打ち上げしたり、お互いのライブを観に行ったりと仲は良い。

「悠夜くん……………」

『田宮さん！？ 大丈夫ですか！？ 顔色が悪いですよ！！』

田宮さんの顔色は青ざめていて憔悴しきった顔をしている。

『田宮さん…………取り敢えず車に乗って下さい。病院に行きましょう……………』

俺は田宮さんを抱き起こすと車に向かった。

「悠夜くん…………ごめんね……………」

『何を言ってるんですか…………大丈夫ですから……………』

「本当にごめんね？」

『だから気にしないで下さいよ。俺は気にしてん  
…』くっ！?』

突然、腹部に痛みが走り俺は苦痛の音が滲み出た……

『くっ……！? 何が!?!』

俺は自分の腹を見ると刃渡り30センチは軽々と越えるナイフが深々と刺さっていた……

『田……宮……さん? 何で……?』

俺は何とか自分の腹からナイフを抜き取るとそのまま投げ捨てた。  
アスファルトにカランと音が鳴り響く……

『くっ……』

腹からは血が流れ地面にはまるで川のようにどんどん流れ落ちている。

『田宮さん……取り敢えず病院に向かいましょう……俺、少し頭が  
くらくらして来ました……』

「悠夜くんは本当に優しいね……私に刺されたのに何も言わないし  
な……」

『田宮さんが訳もなく人を刺すなんて有り得ないです……』

「本当に優しいね……残酷なくらい……」

『何が……ですか？』

「悠夜くんはさ……誰にでも優しいの……それでいて自分のスタイルは確りしていて崩さない……完璧なんだよ……だから翔子ちゃんも悠夜くんに惹かれるんだよ!？」

『水城……さんが？　だくどそれで何故、自分が田宮さんに刺されるんですか……？』

「分からない？　ううん……悠夜くんが分からない筈は無いよね……私の気持ちが……」

『……………』

確かに俺は気付いていた……田宮さんも水城さんも俺の事を……

だけど俺はそれに気付いていない振りをしていた……何故なら新しい関係になる事で今の関係を壊したくなかったし、

俺にはどちらかを選ぶ事が出来なかった……

「それで、昨日、翔子ちゃんから電話が来て明日、悠夜くんに気持ちを伝えるって言われた……だけど……悠夜くんは私の物。これで悠夜くんは誰の物にもならない！！　ずっと私の事だけを見てくれる！！　最初からこうしていれば良かったんだ　これで私達はずっと一緒だよ」

狂った様に告白する田宮さんを見つめながら俺の意識がだんだんと遠くなって行き体が崩れ落ちる。

死ぬのか………だけどこのまま死ぬ訳にはいかない……  
伝えないと……俺の想いを……

『田宮さん……ごめんね……俺がはつきりとしなかったから……俺はひかりの事も翔子さんの事も好きなのに選べなかったから……』

「えっ!?!」

田宮さんの顔から狂気の色が消え、戸惑った様な顔になる

『俺は最低で………自分の気持ちにも蓋をして2人に嘘をついてた……でも………今なら言える……俺はひかりも翔子も愛している………』

「悠夜くん!?!　ごめんね!?!　私………何て事を………!!」

ひかりの眼から涙が溢れて俺の顔にぱたぱたと落とす

『泣かないでひかり……俺は大丈夫だから……』

「待ってて！！　今すぐ救急車を呼ぶから！！」

『ひかり待って……俺の上着のポケットにCDがあるから取ってくれ……体が自由に動かないんだ……』

「CD！？　今はそんな事よりも　『頼む……』　分かったよ……これだね？」

『この曲は……新曲のデモテープ……俺が……自分の気持ちを込めてひかりと翔子に贈るつもりで作ったひかり達の為に作った曲だ……後で聴いてくれ……』

「分かった！？　分かったからもう喋らないで！？」

『良かった……ずっと伝えたか……　ったんだ……　やっと……　本当に書きたい曲が書けた……』

「悠夜くん！？　確りして！？　悠夜くん！？」

『最後に……　もう一度だけ歌いたかったかな……　《君は俺が求めていた全て　俺の空っぽな魂が感じたかったもの　君は俺が待ち望んでいた者……　夢の中で探していた者……　君は俺の魂……俺という存在全てに光を射してくれた  
もう君以外の人には目も心も向けない……

君は俺の運命の人

運命はそれを知っていたんだ……

そして、今日、君を俺の前に連れて来てくれる 》……………受け  
取ってくれ……俺の歌を……」

「悠夜くん！？ 目を覚まして！！悠夜くん！！！！……………いやああ  
ああ~~~~！！！！？」

## プロローグ（後書き）

主人公……まだ転生してないし……

因みにここで登場した人はネタです（笑）

モデルは居るのですが、バレバレかな……

## プロローグ2（前書き）

何かすでにグダグダですね……

ご容赦下さい…



## プロローグ2

『ん？　ここは？』

そこは白い空間が広がっていた

確か俺は……

ひかりに刺されて……

『死んだのか……？』

「そうよ」

『っ！？』

突然の声に咄嗟に身構える。

「やあ～ねえ～　ビックリしたのは分かるけど身構える事は無いじゃない……」

振り向くとそこには女性が微笑んでいた。

だがその女性の背中にはまるで神話に登場する天使のような翼がついていてその存在感は人には有り得ないほど神々しい。

『すいません。突然だったので驚きまして……所で貴女は？』

「神でも天使でも好きによんで良いよ」 私は悠夜って呼ぶから  
『はあ……では神様、俺は死んだんですよね?』

「様とか要らないのに」 うん、悠夜は死んだよ? 下界ではファン  
の娘達とかで大騒ぎになってるよ?」

やっぱり死んだんだ……

それは良い……それよりも今は……

『ひかりは……ひかりはどうなりましたか?』

「ずっと見てたけど本当に残酷なくらい優しいわね……まあ良いわ。  
彼女ならちゃんと自主して罪を償っているわ」

良かった自殺とかされてなくて……  
ひかりには幸せになって欲しい……

『あの……所で俺はこの後はどうなるんですか?』

「やっと来たわね 貴方にはこれから違う世界に転生して貰うわ」

『……………?』

「ここはキタ〜〜！とか、テンプレ〜〜とか無いの!？」

『えっと…………テンプレって何ですか?』

「知らないのね…………ここに来る人は大抵知ってるのに…………」

『すいません…………? 所で他の人って言ってましたけど他の人も来るんですか?』

「最近は多くてね 神のミスで死なしたりとか増えたのよ」

『もしかして…………自分も…………ですか?』

「違うわよ 貴方のはどうしようもない事実よ」

『そうですか…………良かった…………では何故?』

「私が貴方のファンだからに決まってるじゃない!」

『……………は？』

「もうさっきから我慢してたけどもう限界　握手して～～　サイン頂戴」

『はあ……………応援ありがとうございます……………これで良いですか？』

「ありがと～～　これで他の女神達に自慢出来るわ」

なんだか神様がそこら辺にいる女子高生に見える……………てかこっちでも知られていたんだ……………

「じゃあ～何処の世界に行く？　サービスで能力もオマケしちゃうわよ～？」

『えっと……………世界に能力って何ですか？』

「世界って言ったら漫画の世界にチートな能力に決まってるじゃない

い  
」

『すいません……漫画とかあんまり読まなくて……アニメも余り……』

「えっ！？ 全く知らないの！？ 貴方、声優もやってたじゃない！？」

『えーと……けいおん！ならバンドの話でしたし読んだ事がありますけど……』

「ゲームは！？」

『FFとかドラクエとかなら……』

「じゃあネギまとか、FATEとか、リリカルなのはは！？」

『なのはならゲームで声優やりましたけど詳しく無いです』

「ならなのはの世界にしましょう！！ 能力は私が見繕ってあげるわ！！ 容姿とか基本スペックは元々弄らなくてもチート地味てるし」

『良くは分からないんですけど、褒めてます？ それ？……………確かなのはの世界って魔法とか戦闘が有りましたよね？』

「大丈夫！！ 魔力は最高にしてデバイスも用意するから……………えーと何も知らないからサポート出来るユニゾンデバイスに〴〵守護する人も居るでしょう〴〵 それからネギまの別荘と王の財宝は……………彼が知らないから空間だけ……………それと悠夜には歌っていて欲しいから詩魔法を使える様に……………」

『何だか不安だな……………』

「それからそれから道具を作ったりする知識に……………出来たわ！！」

『終わりましたか？ でも自分はそこで何をすれば良いんですか？それに能力とかも分からないし……………』

「大丈夫！！ ちゃんとサポートする人も居るし、悠夜は好きにやって頂戴」

『分かりました。取り敢えず頑張ってみます』

「じゃあ行ってらっしゃい」

『行って来ます』

そういうと自分の体に光りが射して意識が消えていった

## プロローグ2（後書き）

という訳で本編になります

実は私は余り原作とか詳しくないんですよ……

ですのでアドバイスとか貰えると嬉しいです。

駄文ですが宜しくお願いします。



## 第1話（前書き）

という訳でなのはの世界にやって来ました。まだ原作キャラは登場しない……

## 第1話

『ここが違う世界か……』

と辺りを見回してみたがそこは自分がいた所と余り変わらない普通の公園だった

『確かに広くて海が見えて居心地は良さそうだけど、普通だな……』

てつきり近未来的な都市とか魔法学校を創造していた俺は余りの普通さに驚いていた

「マスター今時それはないですよ〜」

『何奴!!?』

咄嗟に俺は時代劇でのやられ悪代官風で応えてしまった……

「ムムム……！ お前に名乗る名は無いです……！？」

何故か謎の声の少女？は乗ってくれた（笑）

「ってマスターがそんなにノリが良いとは思いませんでしたよ」

『ごめん……体が勝手に反応しちゃって……』

と振り向いた先には誰も居ない

『あれ？ おかしいな……確かに声が聞こえたのに……』

「むう……こっちですよ……！上を向いて下さい！」

言われて上を向いて見るとそこには30センチ位の可愛い少女が浮

いていた……

『……………えっと、デーモン?』

そう言うとその可愛いデーモンは両手をぐるぐる回しながら

「違いますよー!?! 何処をどう見たら可愛い私がデーモンに見えるですかー!?!」

『ごめん……ビックリしてつい……』

少女が必死の表情で顔の前で暴れるのですぐに謝った。

「仕方ないですねー今回は特別に許してあげますよ」

『ありがと。それで、君は誰? それとこの場所が何処だか分かる?』

「私はですねーフェリって言います マスターのパートナーでユニゾンデバイスです! それから此処は海鳴市の公園ですねー」

『海鳴……? ユニゾンデバイス?』

海鳴市なんて聞いた事ないしユニゾンデバイスって言われても意味が分からない

『なあ、フェリ……もうちょっと詳しく教えてくれないか？ さっぱり分からないよ……』

そう言うとフェリは少し考え始め俺の顔をジロジロと見てきた……

「マスター それは構わないんですけど、こんな時間に子供が一人で公園に居たら補導されちゃいますよ？」

……何を言ってるんだこいつは？ 俺がどうしたら子供に……

『そう言えば……やけに視線が低い様な……』

そこで俺は近くにあった公衆トイレに急いで駆け込んだ。

『……………どうなってるんだ……………これは……………』

鏡で自分の体を見てみると確かにそこには俺が居た……………小さい子供  
の体で……………

『見たところ5〜6歳位か？ でも何で……………』

俺が呆然としていると突然頭に声が響いて来た。

《やっほ〜どう？ ビックリした〜？》

『この声は……………神様？』

《そーです 今、悠夜の頭に直接に声を届けてるんだよ 凄  
いでしょ〜》

……………一瞬イラッとしたがここは耐えておこつ……………

『あの……俺の体が子供になってるんですけど……』

《そりゃあ〜そうよ〜あたしが小さくしたんだしい〜》

『……………訳を教えて貰っても構いませんか……？』

《だってさ〜前の年齢だとさ……介入したらロリコンだよ？》

『……………は？』

《だから〜良い歳の大人が小学生と一緒に居たら犯罪だよ〜？》

『あの……小学生以前に、幼児なんですが……？』

《……………ミスっちゃった　めんご〜〜》

俺……………切れても良いよね？ここまで必死に堪えて来た筈だ……

『ふざけるな！？　第一、俺は原作も知らないし、これからどうすれば良い！？』

《もしかして……………怒ってる？》

『当たり前だ！？　せめて説明位ちゃんとしろ！！』

《分かったから怒らないでよ　説明するからさ》

『分かった……じゃあフェリの所に戻ろう。　フェリの事も説明してくれよ？』

《アイアイサ〜》

《分かった？》

『……………本当に小学生か？』

《本当よ》

しかし……アニメの話しだと思っていたが随分とハードな世界だな……  
大人は腐ってるとしか言えない……

《もしもし？考え込むのは後にしてさ家に帰ったら？ちゃんとあ



たしが用意したのよ！！ あたしがね！！》

『あつ、ああ……ありがとう。場所は？』

《フェリにちゃんとインプットしてあるから大丈夫　じゃあそろそろあたしは失敬するわ》　因みにあたしが連絡するのはこれで最後だからね？　じゃあばいびー》

嵐の様な神だ……

『フェリ行こうか？　案内を任しても良いかな？』

「任せて下さい！マスターこっちです」

フェリと家に向かいながら周りの景色を見る……

数年後にはこの町でジュエルシードを巡る戦いや闇の書事件が起きるとはとても考えられない程穏やかな町だと思う。

しかも小学3年生の少女が……

自分にどれだけの力があるとかは分からないが若い少年や少女が傷つき大人が何も出来ないのは間違ってる。自分の出来る限りの事をしようと心に誓い新しい我が家を目指した。

## 第1話（後書き）

相変わらずグダグダですね…

次回は新しい家と悠夜能力の説明になると思います。  
出来たらプロフィールまで行けると良いのですが……

## 第2話（前書き）

まずは悠夜の会話なんですが、『から他のキャラと同じ様な』に変更しました。

『はデバイスの方にしようと思ったので……

では2話宜しくお願いします。

## 第2話

「着きましたよ　　ここが私達のお家です」

「…………随分とデカイ家だな…………2人ならこんな屋敷は必要ないんじゃないかな」

そう…………それは家と云うより豪邸、屋敷の方が近い。

向かいにある月村さんって方の屋敷も大きいがそれよりも大きい…………

「そんな事はないですよ、それに私達だけじゃ有りませんよ？  
守護騎士さん達も居ますし、広い方が修業とか魔法を扱うにはピッタリなんですよ？」

守護騎士か…………確か夜天の書にもヴォルケンリッターという騎士が居たな…………　　そうなると俺にもそういう書があるのか？

「なあフェリ？　俺にも夜天の書みたいないなデバイスがあるのか？」

「書とは違いますけど有りますよ」 私はその管制人格ですから  
」

「何処に有るんだ？ 何処にも見当たらないけど……」

するとフェリは俺の体を見ながら……

「マスターの身体の中に決まってるですよ」

俺の身体に！？

「なあ……フェリ？ それって出せるのか？」

「それは無理ですね、もし出せたとしても世界が滅びますよ？」

……あの女神は……人の身体を何だと思っているんだ！？

「一体、何が入ってるんだ？　もしかしてロストログアって奴か？」

「ロストログアっていうのは間違いではありませんね　正確にはアルトネリコって云う塔ですね」

「塔！？　何でそんなものが身体に！？」

「待つて下さいよ　ちゃんと順番に説明しますから　マスターは先ずですね？　普通の人間とは違います。レーヴァテイル・オリジンの改良番みたいな感じですね」

「レーヴァテイル・オリジン？　それって何だ？」

「えーとですねー謳う事によって様々な力を発揮出来るです　自分の強い想いを謳う事によって詩魔法を紡ぐ事が出来る人をレーヴァテイルって云うんですけど、マスターは更に特別で塔の管理者として普通より強力な力を持ち、塔が崩れない限りは死なないし、18歳で成長が止まります」

「死なないって……反則だな……それで塔は？」

「詩魔法のサーバーだと思って下さい。そこには全ての詩魔法が詰まっています……この世界では余り関係ないですから」

「急に説明が簡単になったな……じゃあどうやって詩を紡ぐんだ？」

「本来であればパートナーの人に精神世界に潜って貰うんですが、マスターはオリジン、それも改良型なので必要ありませんね。私とユニゾンしてくれば私がマスターの詩を紡げますし、馴れてくれば1人でも紡げますよ」

「成る程……他の能力はどうなっているんだ？」

「そうですね。まずは魔力ですが塔の力もあるので測定は出来ないですねえ。」

普段はリミッターを付けてるのでSS+って所ですかねー他に



も王の財宝（空間だけ）とかアイテムとか沢山有りますね」

「王の財宝（空間だけ）って何？ それにアイテムって？」

「簡単に言えば四次元ポケットです アイテムは主にFFとドラクエですね マスターなら自分で作れると思いますし」

自分で作るって…  
簡単に出来る物か？

「それ以上か？」

「まだあるんですけど……他は今のが完璧にしてからにしましょう」

「分かった。それとフェリ？ 俺の事はマスターって呼ばなくても良いよ？これからは家族だしね」

「分かりました〜 ではゆっや〜って呼びますね」

「何か恥ずかしいけど……これから宜しくなフィア！」

「はい！ 宜しくお願いします！ 悠夜」

そうなるに次にやる事は…

「さて……色々としなくちゃいけない事が沢山、有るけど先ずは…  
…」

「まずはー？」

「こんな時間だし……夕飯にしよう。死んでからちゃんとご飯食べてないし……」

「守護騎士達はどうしますか？」

「明日にしよう。流石に今日は無理だよ……」

「そうですかーじゃあ、お買い物に行きましょうーお腹ペコペコです」

「了解！ って時間は……7時半か……この姿だと厳しいかな……」

「大丈夫です！ 私が居ますから」

「フェリが……？」

「フェリをじろじろと見てみたがどう見ても妖精だ……俺よりもヤバイと思うが……」

「何ですか！？ その眼は！？ 私を信用して下さい」

「だって……ねえ……？」

「良いです!! 見て下さい!!」

そう言うとフェリの身体が光りに包まれた。

そして現れたのは……

「どうですか!? こんなに大きくなれるんですよ?」

確かに大きくはなった。  
なっ たが……

「それでも小さいね……」

最初よりは確かにましだとは思うが、それでも小学生の低学年レベルだ。

「まあ、良いから行くですよ! 悠ちゃん」

悠夜「悠ちゃん……分かったよ……行こうか？」

心に少しダメージがいったがそれよりお腹が減った……

今はご飯が最優先だ！

フェリに海鳴市のマップがインプットされていたので俺達は迷わずにスーパ―丸きゅーにたどり着いた。

「フェリ。何か食べたい物はある？」

からの返事は無かった……

……………ただどフェリ

何処に行つたんだ？

俺は取り敢えずフェリを探す事にした。

今日は良い日や

何時もなら直ぐに無くなる特売品の卵が今日は買えた！

両親を早くに亡くした私からすれば出来るだけ節約せんとな。

私の名前は八神はやて、何だか考えてる事が5歳らしくは無いけど、足が生まれ付き悪くて学校も行けない身としては何時何があっても良いようにお金は大切にせんとな

えつと後は……

と考えながら進んでいたら（ガッソ！！）と音がして車輪が動かなくなってしまった。

「あかん……車輪に何か挟まってもったか？」

挟まってる物を取ろうにも自分で起き上がれない……

誰かに取って貰おうにも周りの人は私の事など気にせずに通り抜けて行く。

「前言撤回や……今日はついてへんわ……」

仕方ないわ。

こつなつたら自分で何とかするしかあらへんな……

私は無理やり立ち上がろうとしたが、

やはり上手く動ける訳がなく……

「（あかん！！ 倒れる！！）」

と目をつぶって衝撃に備えた。（ボフッ！！）……………が何時まで経っても衝撃は無い。

その代わりに花の様な良い香りが全身を包みこんでいる。

「（何や？ 良い匂いや……………まるでお母さんに抱き締められてるみたいや……）」

私は余りの心地良さにすっかり自分が倒れそうになっていた事を忘れてしまった。

「あの大丈夫？」

その声に私は慌てて離れてお礼を言った。

「あつ、あのすいません！！ 助けてくれてありがとうございます  
！！」

私は相手の顔を見る余裕もなく勢いよく頭を下げた。

「気にしないで、俺……いや僕なら大丈夫だから頭を上げてよ」

その声に私は安心して頭を上げた。

其処には……

「（うわあゝすっごいべっぴんさんや／＼／＼／＼……いや僕  
って言ってたから男の子かそれにしてもまるで人形さんみたいやゝ）  
」



其処には流れる様な美しい銀髪を背中までに伸ばした私で同い年位の男の子が立っていた。

フェリを探し廻っているが未だに見付からない……

「本来に何処に行ったんだ？ あいつは……」

改めて店内を見回して見たら急にガツン！！という音が響いた。

俺は何だろうと思って音がした方を見回して見ると、車椅子の女の子が不安そうな顔をしながらキョロキョロと見回している。

「トラブルか？ しかし周りの大人は全く気にしてない……」

随分と薄情なもんだなと思いながら少女の所に向かった。

すると、少女が諦めた様な表情を浮かべると起き上がろうとし始め

た。

「（危ないな……）」

そう思いながら歩く速度を早歩き、駆け足と上げていった。

すると案の定、女の子がフラフラし始め倒れそうになる。

「（くそ！！ 間に合え！！）」

（ボフッ！！）

俺は全力で駆けると倒れそうになってた女の子を抱き締める形で支えた。

「（危なかった……もう少し遅かったらこの子は床に転んでいたな……）」

それにしても彼女は随分と軽いな……  
そんなに年も違わないだろうし……

ん？ 彼女……動かないけど大丈夫か？  
俺は心配になり声を掛けた。

「あの大丈夫？」

そう言うと女の子は慌てて俺から離れると勢いよく頭を下げた。

「あつ、あのすいません！！ 助けてくれてありがとうございます  
！！」

「気にしないで、俺……いや僕なら大丈夫だから頭を上げてよ」

小さいのに随分と礼儀正しい娘だな……  
そう思いながら、俺だと不自然かな？ と思い僕と言い直しながら  
応えた。

すると女の子は安心したのか下げていた頭を上げた。

ん？ 何か人の顔をじろじろと見て考え込んでる。  
髪の色が珍しいのかな……

「えっと、どこもぶついたりしてないかな？ それと咄嗟に抱き締めちゃってごめんね？」

「そんな事あらへん！？ お蔭で転ばずにすんだし、怪我もせんへったで！！」

女の子はそう言いながら頭と手をブンブンと振りながら応えてくれた。

しかし、そんなに慌てなくても良いのに……  
目を回すよ……？

「なら良かったよ。 所で頭は大丈夫……？」

何か目をぐるぐる回してるよ大丈夫かな……？

「大丈夫や！！ これでも八神さんとお嬢ちゃんもしっかりしてるって近所のおばちゃん達には有名や！！」

……愉快な娘だな。

そんな事は訊いてないのに……って質問の仕方が悪かったかな？

「元気そうで良かったよ。ちょっと車輪を見せて貰うよ？」

そう言つと俺はその場にしゃがみ込んで車輪を覗いて見た。

良く見て見ると車輪に何か挟まっている、何かと思って引っっこ抜くとそこには……

「これは……確か、ノア様人形……？」

それは俺が居た世界で大人気のクロス君の災難ってアニメに出て来る大人気のマスコットキャラだ。

以前に声優で仕事した事があるから良く覚えている。

すると今まで混乱(?)していた女の子も我に返ったのか俺の手の中のノア様人形をじーと見ている。

「これ……知ってる?」

俺は尋ねて見るが

「んゝ知らんなぁー……けどメツチャ可愛いなぁゝ」

知らないのか……  
じゃあこれは一体。

《ゴメン！ それあたしが落としたやつ》

……頭が痛くなつて来た……

「（また貴女か！？……いい加減、あんたって呼ぶぞこんちくしよ  
う！？）」

《あんたって呼び捨て！？夫婦みたいねえ》

駄目だこいつ……

「（ていうかもう出て来ないって言うてたじゃないか）」

《おねーさんは気紛れが大好きなの（、・・・）キリッ》

「（もう知らん……それでこれはどうする？）」

だんだん頭痛が酷くなって来た……  
早く終わらせよう……

《悠夜にあげるわ　さうてそろそろ麻雀に行くからジャネー》

「（こいつ……ムカつく……）」

と俺が何時までも黙っていると女の子が話し掛けてきた。

「お兄さん、急に黙ってどうしたん？」

「あつとごめんね？　ちよつと考え事をしてた……それよりこの人形あげるよ」

俺は人形を差し出した。



「いいんか？ でも誰かの落とし物と違うん？」

そう言いながらも興味があるのかチラチラと人形を見ている。

「あゝ、うん。それ自分の姉さんのなんだ……前に無くしたって言うてたやつだよ……それ」

「でも探してるん違うか？ 私が貰ったら悪いで……」

確りした娘だな。

どっかの馬鹿も見習って欲しい位だ……

「うん。新しい奴を買って貰ってたし、姉さんが持つより君が貰ってくれた方が人形も喜ぶよ！」

そう言つと俺は人形を女の子に手渡した。

「そっかー じゃあ貰っとくわ 名前とかあるん？」

「確か……ノア様って名前だったような……」

「ノア様かー何か偉そうだけど良い名前や じゃあこれから宜し  
くな？ ノア様」

そう言つと人形をぎゅうつと抱き締めた。

「さてと……それじゃあ僕はそろそろ行くね？」

いい加減にフィアを見付けて帰らないと……

先程からお腹が食料を寄越せと抗議している。

「そんなぁ……もう行っちゃうん？ もっとお話ししたいわぁ」

そう言つと俺を上目遣いで見つめてくる。

「僕もそうしたいんだけどね……姉さんが待ってるしね」

そう言つと残念そうな顔を浮かべて……

「それならしゃあないかあゝ 本当に残念や……あつそう言えばお兄さんの名前を覚えてくれへん？ 私は八神はやてっていうんや！」

その名前を聞いて俺は驚愕した。

八神はやてと言えば闇の書事件の最大の被害者であり、その後も大変、重要な位置に居る主要メンバーの1人だからだ。

「（確かに車椅子だし関西弁だ……情報だけで知ってはいるが、それだけだ。後でフィアに訊いてみよう）」

黙っている俺を不思議に思ったのか

「お兄さん……？」

と尋ねてくる。

「あつ……何でもないよ。可愛い名前だなんて思ってたんだ。僕の名前は月神悠夜って言っんだ」

「かつ、可愛い？／＼／＼／  
ありがとう　悠夜君って言っんやね。　てっきり外国の人かと思  
ったわ」

八神さんは顔を真っ赤にしながらそう言って来た。

……なんで真っ赤になる？

「八神さんって良い名前だよ　それと僕は一応ハーフだからね…

…」

これは本当だ。

母親が外国の出身で髪の色は母親譲りだ。  
小さい頃はそれで良く構われたっけ……

「へえ、そうなんや？ それと私は八神じゃなくてはやってって呼んでくれへん？ 私は悠夜君って呼ぶから！」

「オッケー！ はやて！ こんな感じで良い？」

そう言うとはやては満面の笑顔を浮かべて……

「ばっちりや」

と言って親指をグッと立ててくる。

それを見て俺も微笑みながら親指を立てる。

「じゃあ、今日から友達や 宜しくな悠夜君」

「ああ。宜しくねはやて」

そうしてはやてと和みながら話していると……

「ゆう~~~~やあ~~~~!？」

と俺を呼ぶ声が聞こえる。

ってかその声は……

俺は声のした方を振り向くと……

「ゆうやあ~~~~!？」

と泣きながらフェリが突っ込んで来る。

「ゆう〜やあ〜！ あかね？あかね？ 美味しそうなお菓子があってね？ ゆうやと一緒に食べたいなあ〜と思っていたらいつの間にか知らない場所に居てね？何だか急に淋しくなってるえ〜」

とフェリは一気に捲し立てて来た。

いや……それってさあ〜

「あ〜良し良し……僕はここに居るからもう泣かないで？」

俺はハンカチを手渡しながらそう言つと。

「ゆうやあ〜〜>^」

ますます激しく泣き出した……  
暫くそつとしておこつ……

「あの……悠夜君？」

話し掛けられた方を向くとはやてが戸惑った表情を浮かべながら

「その人がお姉さん……？」

と訊いて来た。

俺はじっとフェリを見つめる。

「ゆづちゆづちゆづちゆづち……」

はやての方に顔を向けると

「……………一応……俺の姉だ……………」

力無い俺の声がスーパーに響いた……



## 第2話（後書き）

えゝとこの話して悠夜の詩魔法とかの説明がありますが、元ネタはアルトネリコ？ってゲームからです。

あれの自分なりに改良した感じです。

一言で言うなら攻撃が出来るバサラって感じです。

設定やプロフィールは近い内に出す予定ですので…

ではまた次回です

### 第3話（前書き）

え〜と……

まずはすいません!!

少し作者が暴走しました（笑）

### 第3話

その後、漸く落ち着いたフェリと買い物を済ませて向かったのは

.....

「ここが私の家や　　さあ悠夜君もフェリさんも入って入って」

「ここがはやてちゃんのお家ですかあ　　良い所ですねえ」

「.....はあ」

何故、俺達がはやての家に訪れているかは簡単だ.....

あの後、泣き止んだフェリのお腹が鳴ったんだ.....

それを聴いたはやてが夕飯をご馳走したいと言いだし、フェリが

それを喜んで受けた形だ……

最初、遠慮した俺だけど…はやてが久し振りに楽しいご飯が食べれると本当に嬉しそうな顔で話すのを聞いて何も言えなくなった。

因みに、はやての両親が亡くなっていると云うのははやてから聞いている。

そんな事を、会ったばかりの俺達に話して良いのかと尋ねたら、悠夜君とフェリさんは友達やからの一言で済ました。

はやての家に向かう最に俺達の事も話した。

勿論、転生した事や魔法の事は話さなかったが、俺達が姉弟で2人で暮らしている事と、近々、親戚と一緒に暮らす事は話した。

親戚ってのは勿論、守護騎士達だ。

フェリともだいぶ打ち解けたようで、すっかり仲良くなっている。

「悠夜〜入らないですかあ〜早く入りましょう〜」

「ああ…… ごめん。じゃあ入ろうか？」

はやての家に入ると先ず目に入ったのが……

「タイースのマスコット？」

玄関に置いてあったのが某野球チームのマスコットだ。

はやては阪ファンなのか……

ていうか此処にもあるんだ 神。

予断だが俺はジャ アンツファンだ。生前に始球式に出たのがきつかけた。

「ん？ 悠夜君、そんなにそれ見てどうしたん？ もしかして阪ファンか！？」

「……はやてゴメン……俺、巨ファン……」

「……………」

「何ですかあ？ 巨人に阪神って」

フェリの馬鹿！？

せっかく伏せ字にしてたのに！！

「そっか、悠夜君は読の手先か……」

何だろう……

はやての背中に虎のオーラが…

「はっ、はやて!! 僕は基本的に嫌いな球団は無いんだ!! それに好きとは言ってもそれ程、詳しくは無い!？」

「ふーん……そうなんか……だったらこれを着てみい!？」

そう言っではやてが取り出したのは虎のハッピだった……

これを着るのか？

俺には……俺には……!？」

「僕にはとても出来ない……」

「あっ!？ やっぱ無理やったか!! 私の方が好きならこれを着い!？」

「はやて!？ 何か無茶苦茶だよ!？ 落ち着いて!！」

「これが落ち着いていられるかい!? 私の夢は好きな人と2人で  
甲子園に行く事なんや!?!」

はやてが壊れた……

俺はフェリに助けを求めようと視線を向けたが。

「（＊ 〓 〓）ボー」

あいつは!?!?

見るからにのほほんとした顔をして!?!?

……仕方ない。

何とか落ち着かせねば……

「はやて………」

「何や!?!?!?」



俺は手を開いて見せて何も持っていないのを確認させると、手をグツと握った。

そして開いた手の中には小さなお花があった。

「あげるよ」

そう言って手渡すとはやては最初はポカンとした表情だったが次第に笑顔に変わり。

「ありがとう！ 悠夜君って手品が出来るんや！ それにしても綺麗な花やなあ」 私、お花のプレゼントなんて初めてや」

ほっ……どうやら誤魔化せたみたいだ。  
はやてに野球の話題はしない様にしよう……

そう考えていると今度はフェリがむくれ始めた。

「むうゝ 悠夜！？ はやてちゃんばかりズルイよ！？ 私もお花が欲しいよ！？」

今度はフェリか……

仕方なく俺はフェリに同じ様にお花を出してあげた。

「わーい 悠夜からお花貰いましたあゝ」

その姿は愛らしく俺より年上の（設定）には無理がないか？

「フェリさんも良かったなあ」

「はいです はやてちゃんありがとうゝ」

まるで姉妹だどちらが姉に見えるかは口にはしないが……

「さて、じゃあ晩御飯作るから待つといてな！」

はやてはそう言つと立ち上がった。

流石にただ待つのもアレだな…… よし……手伝うか。

「なあ、はやて。 僕にも手伝わせ貰えないかな？」

「あれ？ 悠夜君、料理出来るんか？」

自慢ではないが料理は転生前から好きで、休みの日には仲間になど良く振る舞つてた程だ。

「ああ、料理が趣味でね家でも僕が作る予定だよ」

「そうなん？ そら楽しみや！ だつたら別々に作らへん？」

「良いよ。じゃあ何を作ろうかな」 姉さんはどうする？」

「私も作りますよぉ？ 悠夜！ 楽しみにしてて下さいねー」

どうやらフェリも作る様だ、ていうか料理作れるんだ……

そんな事を考えながら俺ははやてに続いてキッチンに入っていた。

＼SIDE OUT＼

＼はやてSIDE＼

悠夜君が料理を作る何て意外やな……

だけど、私だって料理は得意や！ 男の子には負けへん！！

でもお互いに料理が作れるのはポイントが大きいな 結婚生活  
もバツチリや

「って料理中に何を考えてるんや！？ 料理に集中せな……………」  
でもええなあ／／／／／」

その後、はやての妄想は新婚生活から老後まで進んだそうな（笑）

くはやてSIDE Endく

くフェリSIDEく

参りましたねえく

私は産まれたばかりで料理何かした事がないんですよねえく

女神様も魔法とか能力とかだけじゃなくて料理の知識も付けて欲しかったですう……

でもここで何もなかったら悠夜ははやてちゃんに盗られちゃいます！

知識は無くても愛情があればきっと美味しくなるはず！！

「取り敢えず、適当に色々入れてみましょう」

フェリの鍋からは怪しい紫色の煙りが吹き出ていた……

＼フェリSIDE End＼

＼悠夜SIDE＼

何だろう……

何だか嫌な予感がある。

はやては顔を赤くしてぼーっとしてるし、フェリに至っては鍋から妖しい煙りが出てる……

「……とにかく今は自分の料理を完成させよう……」

決して現実逃避した訳では無いからね……

そして各々、料理を完成させて食卓に着いた。

「まずは私からやな！ さあ 食べてみて！」

はやてはハンバーグにサラダそれからゼリーを並べた。

「ふわぁ〜 はやてちゃん美味しそうですう」

フェリが歓声を挙げる。

確かにどれも美味しそうだ。5歳児とは思えない見栄えだ。

「悠夜君！ 見るだけじゃなくてはよ食べてな？」

「うん。とても美味しそうでつい……………」

「じゃあ頂きます！」

俺は早速、ハンバーグにナイフ入れた。



「凄い……チーズ入りだ……味は………うん!!  
美味しい」

そのハンバーグはまるで小さいころに母親が作ってくれた味を思い出させてくれた。

サラダもゼリーもとても美味しく、5歳の女の子が作る料理のレベルでは無かった。

「本当に美味しいよ! はやては料理上手だね」

「ほんまか!? 良かった 悠夜君に気に入って貰えて嬉しいわ  
フェリさんはどうですか?」

「美味しいですう」 はやてちゃんは良いお嫁さんになりますよ  
お」

「ふえ!? フェ、フェリさん!? それは褒め過ぎやで…… / /

／／  
「

とはやてが顔を真つ赤にして此方をチラチラと見てくる。

あれ？ もしかしてかなり懐かれた？

……でも逢ったのも今日が初めてだし、友達になったのもついさっきだし……気のせいだろう。

和やかな雰囲気ではフェリの番になったが……

……これは……何だ？

なにやらスープみたいだが、色が赤かったり青くなったり変色するし、酸っぱい匂い？がしたり固形物がアメーバの様に浮いている。

「……………」

「あはは……………」

「さあゝ はやてちゃんに悠夜、食べて下さい」

上から俺、はやて、フェリである。

「……………なあ？　姉さん……………これ……………ナニ？」

「料理名は分かりません！　強いて言うならジャインシチューです！」

何故お前がそれを知っている！？

「なあ……………はやて？」

「……………何や……………？」

「これ……………食べるの？」

「あかん！？　うち今日は体の調子があかんねん！？　悪いけど、それは悠夜君が食べてくれへん？」

はやて！？　逃げたな！？　でも……確かにこれははやてには食べさせられないな……

「……………くっ！！」

「（すまん！！　悠夜君……私には絶対無理や！！）」

「ワクワク」

仕方ない……

確か毒消しとエリクサーがあつたよな？  
なら死にはしないだろう。……多分（汗）

「いざ……勝負……！！」

〵〵暫くお待ち下さい〵〵

「……………姉さん……………今度……………料理……………教えるよ……………」

あれは……………兵器だ……………

気を取り直して俺の料理を披露する事になった。

「さあ、食べてみてくれ」

俺が作ったのはシンプルに和食にした。大根と鮭の炊き込みご飯に煮物に焼き魚、デザートに黒胡麻プリンを作った。

「美味しそうや……」

「ですう」

良かった……最初は洋食にしようかと思ったが、敢えて和食にしてみたが正解だったかな？

「あはは、ありがとう　じゃあ食べてみてくれる？」

「そやな　じゃあ頂きます」

「ますです！」

2人はパクリとご飯から口にした。

「……………」

「……………」

2人共、箸を置いてプルプルと震え始めた。

「（あれ？　もしかしてミスったかな……………」

俺がそんな不安に駆られ始めたその時……

「「美味しい」」

2人が同時に叫んだ。

良かった……ミスった訳じゃなくて……

その後、2人は喋るのを忘れて一心不乱に食べ始めた。

「悠夜君！！ お代わりや！！」

「私もお願いします！！」

そんな2人に微笑みながらお代わりをよそって手渡す。

く悠夜SIDE OUTく

くはやてSIDEく

こんなに騒がしくて楽しいご飯は何時以来やる？



そういえばお父さんとお母さんが生きていた時は毎日が楽しく暖かかった。

ふと悠夜君とフェリさんの方に視線を向けると……

悠夜君は微笑みながら私達が食べているのを見てるし、フェリさんは一心不乱にご飯をかき込んでいる。

何だかその光景を見ると胸が暖かくなり、何だか……

「はやて！？ どうした！？ 何があった！？」

……え……？

「はやてちゃん泣いてるんですか？ 何か辛い事があったんですかあ？」

悠夜君とフェリさんか心配そうに訊いてくる。

私はそれを聞いて手を頬に当てた……

あれ？ 私、何で泣いてるんやろう？

こんなに楽しくて暖かいのに何で……

そう考えていたらふと身体が暖かい何かに包まれた。

「……ゆ、悠夜君……？どうしたん？……急に抱き締めたりして……は、恥ずかしいやん………」

私は茫然としながら悠夜君に話し掛けた。

「辛いなら泣いても良いんだよ………」

「そん……な、うちは辛くない……で？　こんなに……楽しいのに………」

そう言いながらも私の眼からはどんどんと涙が溢れてくる。

どうしたんやろ？　私は何処か壊れてるのかなあ？

おかしいな……何で止まらへんのやろ……

お父さんとお母さんが死んじゃった時も泣かへんかったのに……

「はやて。我慢する必要は無いんだ……これからは辛い事があつたり悲しい事があつても俺達が付いてる。だから……泣いても良いんだ……」

そう言いながら悠夜君は優しく私の頭を撫でてくれる。

……そっか……うちは泣いても良いんや……  
そう思つた瞬間、私はもう我慢が出来なくなり……

「うわあああん!!? お母さんが!! お父さんが!!? うちを独りにしないで!? うち、何でもするし、脚が動かなくなつても平気や!! だから……だから独りにしないで!? 寂しいのはもう嫌や!!」

うちは何もかも忘れて、初めて感情の全てをさらけ出し感情の赴くままに叫び泣いた。悠夜君は何も言わずにうちを抱き締め続けてくれた。

第4話へ続く……

### 第3話（後書き）

因みに私はプロ野球のファンです（笑）

はやての阪 ネットは正直どうかと思うのですが、余り突っ込まないで下さい（汗）

それにしても進むのが遅いなあゝ

何時になったら守護騎士に魔王様出るんだろう……

早めにプロフィールも出したいなあゝ

では次回、お会いしましょう。

## 第4話（前書き）

何だか進みが遅いな……

気長にお付き合いしてくれと有難いです。

## 第4話

その後、泣き止んだはやてはフェリとお風呂に向かい、俺は洗い物をしている。

はやては最初は、自分がやると言っていたが俺が許さずフェリとお風呂に入ってきたと伝えた。

フェリは大賛成してはやてを引き摺って行った。  
俺も誘われたが丁重にお断りした……

……いや、いくら子供でも一緒は変だろ……

今ではお風呂場からは楽しそうな声が洗い物をしている此方にまで聞こえてくる。

「良かった……フェリのやつ上手くはやての気を紛らせてくれるみたいだ……」



はやては今まで友達が居なかったらしく、明るくしてはいるがこういう経験が無かったらしく、どこか無理をしている空気があったが今ではその様子は見られない。

「フェリに感謝だね……男の俺だけだったところはなかなかたし、フェリの天然な明るさは俺には出せない……」

まあ、あいつの明るさはバカっぽく見えるけど、人にはそれが大切だ。

俺は洗い物を終わると食器をしまい、紅茶を入れて懷から本を取り出して読み始めた。

因みに本は女神が家の本棚に用意してくれた。

本棚と云ってもそれは小さな図書館みたに広く沢山の本が置いてあった。

魔法関係や能力の詳しい事が書かれた魔法書、デバイス関係といった様々な役に立ちそう本ばかりだ。

「しかし、小説や詩集はまだ良いけど漫画はどうだろう……」

いや、漫画もまだ良い…… 問題が有のはどう見ても子供が見て良い物では無いものが存在した。

「あれは見なかった事にしよう…… 後で処分しておかないとね……」

あれを最初に見た時は余りの酷さに頭痛が走り、女神に向かって怒鳴り込みに行きたくなっただくらいだ。

「思い出したら、鳥肌が…… もうやめよ……」

俺は余計な事を考えるのは辞め読書に集中した。

＼SIDE OUT＼

＼フェリSIDE＼

今、私とはやてちゃんと一緒にお風呂に入ってます。

最初は悠夜も誘ったんですがあっさりと断られました。

残念だけど次は必ず一緒に入りますからねえ。

「あの、フェリさん？」

「何ですかあ？ はやてちゃん」

「あの……さっきはすいませんでした！！ 見苦しい所をみせてしもつて！」

はやてちゃんはそう言いながら頭を下げた。

まったく本当にこの世界の娘達は子供らしくないですねえ……

なのはちゃんやフェイトちゃんにも言えるし事ですけど、もう少し周りの人に甘えたり我が儘を言ったりとか子供らしい所があっても良いはずですよ」

「はやてちゃん？ 何でそんな事を言つですか？ 悠夜も私も全然、気にしてないですよ」

「だって、うち……沢山泣いてしもうたし、迷惑掛けてもうた……」

やっぱり考え方が大人ですね……今までの状況が状況だけにそう考えざる得ないのは仕方ありませんが……それだと哀しいです……

「はやてちゃん……誰が迷惑をかけたんですか？ 何でそう思うんですか？」

「だってあんなに沢山、泣いてもうたし……悠夜君にも迷惑掛けてもうた……」

もう

はやてちゃんはもう少し我が儘を言った方が良いでしょう。

それにしても悠夜君にもですかあ

これから、悠夜と一緒に居るなら心配は無いですかねえ

「はやてちゃんつてもしかして悠夜の事が好きになっちゃいましたかあ？」

「フエ、フェリさん！？何でいきなりその話になるんですか！  
？ かつ、関係ないじゃないですか／＼／＼」

あらあら真っ赤つかですねー

可愛いですけど、私には余り嬉しくは無いですね……

「むうゝ！？ はやてちゃんが素直にならないなら考えがあるですう！？」

私はそう言うとはやてちゃんを撥り始めた。

「ちよっ！？ フェリさんやめ……………あ、あははは」

「参りましたかあゝ？ 参ったなら私の事はさん付けしないで呼べですう」

「フエ、フェリさん！？それ関係な……………キャハハハ！？」

「どうですかあ？ 呼ぶ気になりましたかあ？」

「キャハハハハハ 呼ぶ！！ 呼びますからもう辞めてええ！？」

「分かれば良いですよ お友達に遠慮は要らないですう」

「フェリさん……………おおきに」

「ハ・ヤ・テちゃん……………？」

「すみません！！ つい……………じゃあ、フェリちゃん宜しくな」

ちゃん付けですかあゝ

まあそれ位なら構いませんかねえ

そうして2人はお互いに身体を洗ったり、はやてのお笑い話にフェリが爆笑したり、楽しく入浴を済ませた。

＼フェリSIDE OUT＼

＼悠夜SIDE＼

そういえばはやての脚が悪いのは夜天の書の改竄のせいだったよな？

なら今の内に何とか出来ないかな？

「（魔法関係の事はまだ良くは分からないけど、フェリなら詳し



いよな？ 後で訊いてみるか……）」

幸い、魔法関係の資料や本は沢山用意されていたので、あの別荘とやらを使いながら知識を付けて修業に励めば俺の潜在能力ならこの世界を変える事も容易であるとフェリは言っていた。

「（そんな事を言われても実感が湧かないけどね）」

だが俺に少しでも力があるのなら少しでも良い世界になるよう、子供が笑って居られる世界になれる様に努力は惜しまないつもりだ。

そう考えているとはやて達がお風呂から帰って来た。

「ただいま」 悠夜君、食器洗ってくれてありがとな」

「ああ、構わないよ。それから紅茶を勝手に貰ってるよ」

「それこそ構へんで　でもうちも悠夜君の煎れた紅茶が飲みた  
いなあゝ？」

「あつ、私も飲みたいですうゝ　悠夜ゝ　煎れた下さいゝ」

「分かったよ。今、煎れるから……」

俺は立ち上がると紅茶を煎れに台所に向かった。

俺は手早く紅茶を用意するとフェリの隣に座って話しかけた。

「そういえば姉さん、そろそろ時間が時間だしさそれ飲んだら帰  
ろつか？」

すでに時間は10時近いはやてもそろそろ寝る時間だし俺も流石  
に色々あったので疲れている。

「もう そんな時間ですかぁ…… 確かにはやてちゃんもお休みの時間ですねえ」

フェリも壁に掛けられてる時計を確認しながら残念そうに言った。

するとはやてが……

「なあなあ、今日はもう遅いし家に泊まってかへん？」

と何やらそわそわしながら訊いて来た。

「え、本当ですかぁ？ 私は泊まりたいですう」

少しは遠慮する事を覚えろよ……

「姉さん……少しは遠慮しようよ。　なあ、はやて……　迷惑じゃないか？」

「そんな事はあらへんよ　うちもフェリちゃんと悠夜君ともう少し一緒に居たいし……　迷惑なんかあらへん！」

「そうですよあ　はやてちゃんもそう言ってるしお泊まりしましよようお〜」

「姉さんは少し自重する事を覚えようね……　じゃあはやて、悪いけど泊めてくれるかな？」

「勿論や！　じゃあ悠夜君もお風呂に入って来たらええよ。　うちはベッドの用意しておくから」

「俺ならそのソファで構わないけど……」

「駄目や！ 風邪引いてまうで？ ちゃんと用意するから大丈夫や！」

「分かったよ。じゃあ姉さん？ はやてを手伝ってあげて？」

「任せて下さい！ しっかりとお手伝いしますから安心してお風呂に入って来て下さい！」

「2人共宜しくね？ じゃあ行つて来るよ」

そう言つと俺はお風呂場に向かった。

俺はその時、フェリとはやてが何か企んでいる様な顔をしていたのには気付けなかった……

「フェリちゃん……」

「分かってますよ！ はやてちゃん」

そう言うつと2人は寢室に向かった。

俺は風呂から上がると

2人は仲良くテレビを観ていた。

「あつ、上がったんや、どうだった？」

「良い湯加減だったよ。気持ち良かったよ」

「それなら良かったわ 次は悠夜君も一緒に入ろうな」

……………何故、一緒に入りたがるんだ？

どちらかと言うと俺は風呂は1人でノンビリ浸かるのが好きなんだけど……

だが、はやての顔を見るととても楽しみにしている様子が見られる。

何て答えりゃ良いんだ？あの表情を見せられては断るのも難しい

……

「……まあ、その内ね。機会があつたら」

「約束やで！ フェリちゃんも聴いた！？」

「はい！ バッチリですう」

何かやけに仲良くなつてないか？

何時の間にかフェリの事をちゃん付けで敬語じゃなくなってるし……

「取り敢えず、そろそろ寝ようか？　もう遅いしさ……」

「ほんまや……そういえばさっきから眠たくなってきたわ……」

はやてはすっかり眠そうで目をクシクシと擦っている。

「私も眠くなりましたぁ……」

「それじゃそろそろ寝よか……　悠夜君付いて来て……」

はやてに付いて寝室に入って行くとそこには少し大きめのベッドが1つ置いてあった。

「ねえ……はやて……この部屋ってさ……もしかするとはやての部屋だったりしない？」



その部屋は客室とは違い、本や小説、小物などいかにも女の子部屋って感じがした。

「ん〜？ そっやよ？ 此処はうちの部屋や……」

はやては今にも眠そうな感じで答えてくれた。

「いやさ……僕は何処で眠れば良いのかなって思ってたさ……」

「何を言ってるんや……そのベッドに決まってるやないか……」

「誰が？」

「悠夜君が……」

「はやてと姉さんは？」

「そのベッド……」

「一緒に……寝る……の？　もしかして？」

「当たり前やないか……他に何があるん……？」

はやては何を当たり前のことといった顔をしている。  
まあ、5歳なら確かにそうだろうな……

「姉さん……」

俺は内心呆れながらフェリを見ると……

「~~~~~」

明らかに誤魔化そうと鼻歌なんか歌ってるよ……

《なあフェリ？ 誤魔化そうしてるのは良いけどさ…… 少し良いか？》

俺はフェリに教えて貰った念話で話しかけた。

《どうしたんですかあ？ 私は何も知りませんよー》

俺はそれを聴きながらはやてに

「まあ……良いかな。はやて寝ようか？」

そう言いながら素早くベッドに入る。

《悠夜？ 一体、何ですかあ？ 一緒に寝るのが嫌だったん

じゃないんですかぁー?」

《それは諦めた……はやてのあの顔を見たら断れないしね……》

そのはやては眠そうにベッドに入ると…

「うー もう眠いしお休みな悠夜君、フェリちゃん……」

と既に可愛らしい寝息んしている。

因みに並び方ははやてが真ん中で左が俺、右がフェリになっている。  
る。

最初、フェリも俺の隣が良いと騒いでいたが、自重して貰った。

《フェリ、夜天の書は今から何とか修復とか出来ないかな?》

そう伝えると俺は本棚に置かれた一冊の魔法書に目を向ける。

《成る程、そういう事ですか。ちょっと待って下さいね　はや  
てちゃんが寝入ったら調べてみましょう》

《分かった……頼む……》

そうして暫く時間が経つとはやてが完全に寝入ったのを確認すると、俺達は静かにベッドから抜け出した。

《じゃあフェリ頼んだ……》

はやてが起こさないように念話で話しかけた。

《はい！　お任せ下さい！では調べますよ》

そう言ってフェリは夜天の書を手にとると目を瞑って集中する。

すると夜天の書が淡く光り出しフェリの手から離れ浮かび上がる。

その状況が暫く続き、5分いや10分かもしれないが時間が経っていくと……

そうして漸く夜天の書がフェリの手の中に戻る。

《どう？ 何とかなりそうかな？》

俺がフェリに尋ねるとフェリは閉じていた瞳はゆっくりと開ける。

《そうですね まず一言で言うなら私と悠夜なら修復するのは可能ですう〜》

その言葉に俺はほつと息を吐いた。  
だかフェリの言葉には続きがあった。

《ですが、現在は難しいですねえ……》

《どうして？》

《それはですねえ 今、現在ですけど夜天の書は起動出来ないですうゝ 夜天の書の管制人格さんにも話しかけましたが今は眠っている状態ですね》

《そっか…… 因みに起こす事は出来ないかな？》

《私と悠夜の魔力で無理矢理起動する事は出来ですけど…… お勧めは出来ませんねえゝ》

《どうなるんだ？》

《かなりの普段がはやてちゃんと夜天の書に掛かります。 夜天の書は破壊、はやてちゃんは最悪……》

そこでフェリは声を詰まらせた……

《分かった……もう言わなくて良い……》

俺はそう伝えたとフェリの持つ夜天の書に視線を向けた。

《全く……夜天の書ははやてを苦しめるが大切な家族を与える……夜天も望んだ訳でないだろうけど、皮肉な話だね……》

《マスター……》

《感傷に浸ってる場合じゃないね…… フェリ、じゃあどうすれば良いかな?》



《はやてちゃんには可哀想ですが暫く様子を見て起動状態に入ったら私達で修復するのが今のベストだと思いますう》

……様子見か……

気に入らないけど、はやてとこれからはやての家族となる人達を考えるとそれしかないのか……

《……分かった。そうしよう。その間、俺は知識や力を付けるよ……》

《はい！　マイスター悠夜！　私も守護騎士も力を貸します》

《ありがとう……》

俺は必ず力を付ける……世界全てを護るのは傲慢かも知れない。だけど……子供が傷つき一部の腐った大人が自分の欲望で世界を滅

ぼす……

そんなのは認めない……自分もそれが単なるエゴイズムに過ぎないのは分かっている……  
けど、俺は自分の信じる道を行く……

俺はこの世界に来て、分からないという理由で逃げない事を誓い、決して自分の理想を曲げない事を誓った。

#### 第4話（後書き）

突然なんですが、小説式と台本式ってどちらが良いんですかね？

初心者なんで教えてくれると助かります！

では！

## 第5話（前書き）

やっと守護騎士を出せました。  
ちよっとですけど……

## 第5話

翌朝……

俺とフェリははやてに朝御飯をご馳走になった後、はやての家を後にした。

はやては残念がったが引越しの荷物整理もしなくてはならないし片付けが終わったらまた来るよと言った。

はやては「必ずやで!!」と少し淋しそうな表情を浮かべていたが、帰る時には満面の笑顔で送ってくれた。

「なあフェリ? はやては凄くいい子だね……」

「そうですねえ、それに凄く頑張りやさんです」

「……あの笑顔は護りたいね……」

「はいですう 頑張りましょう! マスター」

フェリと話しながら歩いていると自宅の前に着いていた。

「相変わらずだけどデカイ家だね……」

「良いじゃないですか      せっかく用意してくれたんですから  
」

俺はそうだねと言いながら改めて眺めると……

「表札も何時の間に……」

昨日は夜で気付かなかったが、そこにはしっかりと月神と記された表札も付いていた。

「その辺もばっちりですー」

俺はフェリの言葉に頷きじゃあ入ろうか？ と話そうとしたら……

「あの、すみません」

と後ろから声を掛けられた。

俺は振り返るとそこには、紫掛かった長い髪を純白のヘアバンドをした自分と同じ年位の女の子とその娘が成長して少し活発になったような感じの年上の女の子が立っていた。

「はい。なんでしょうか？」

と俺が返すと

「えーと、私達はその向かいに住んでる月村っていうんだけど貴方達はその家の子？」

と年上の女の子の方が訊いて来た。

「はい。そうです。ご挨拶が遅れました。僕は月神悠夜と云います。それと姉の月神フェリです。宜しく願いしますね」

「宜しくですよ」

俺が挨拶をすると年上の女の子は一瞬ポカーンとした表情をしたが、直ぐに戻し

「これはこれはご丁寧に、私は月村忍よ！ 宜しくね」

と忍さんは挨拶をしてくれたがもう1人の女の子はもじもじと恥ずかしそうに顔を赤らめて俯いている。

「ちよつとすずか……恥ずかしがってないでちゃんと挨拶しなよ」



そう言われて女の子は顔を上げたがまだ恥ずかしそうに忍さんの顔と俺の方をチラチラと見ている。

俺はゆっくりとその女の子に近付くと

「こんにちは　僕の名前は月神悠夜って言っただよ。　良かったらお名前を覚えてくれるかな？」

と女の子に緊張を与えない様に優しく話し掛ける。

……………すると。

「あ、わ、私は……………月村……………すずかつて言います」

と緊張しながらも答えてくれた。

「すずかっというんだ？可愛い名前だね　　すずかちゃん宜しくね」

そう言っで微笑むと最初は緊張していた顔が徐々に笑顔に変わっていき

「うん！　宜しくね！　悠夜くん！」

先程とは違い笑顔で答えてくれた。

「きみ悠夜君だっけ？　　凄いなえゝ　　すずかは人見知りが激しいのにもう懐いてるよゝ」

「お、お姉ちゃん！？」

からかう忍さんと恥ずかしそうに忍さんに詰め寄るすずかちゃん。仲が良いなあ…　と見つめていると不意に忍さんと目があつた。

「あ！ ゴメンね！」

それにしても悠夜君は淒く落ち着いてるね。

それに、最初は淒く綺麗だし女の子だと思ったよ」

……俺ってそんなに女顔かな……  
とショックを受けていると。

「そうですねー 悠夜はとても綺麗だから仕方ないですう」

グサッ！！？

フェリ……お前は……！！

「そうですねー フェリさんもそう思いますよね？」

「私の事は敬語は必要ないですよ」

「本当！？　じゃあ私の事も忍って呼んでね」

すっかり仲良くなってるなと思っていてとちよいちよいと腕を引かれてそちらに目を向けると

「あの……私はカッコいいと思うよ……？  
髪の毛も凄く綺麗だし……」

と俺の髪を褒めてくれた。  
この娘は凄く優しい娘なんだな……

「ありがとう！  
すずかちゃんも凄く可愛いしとても綺麗だよ」

そう言つとすずかは顔を真っ赤にして俯くと

「あ、ありがとう／＼／＼」

恥ずかしそうだが嬉しそうに小さな声で言った。

「へえ、そうなんだ。」

「両親はもう亡くしていて2人だけで暮らして居るんだ？」

「はい。でも両親はこんなに立派な家を遺してくれましたし、姉さんも居るし、それにもう少ししたら親戚の人が来てくれますからね。」

「凄いな悠夜君は……私だったら絶対に泣いてるよ……」

その後、立ち話もなんだからと云う事で2人には家に来て貰った。

2人も流石の広さに少し驚いていたが直ぐに慣れ今はソファに座って紅茶を飲んでいる。

……… 勿論、用意したのは俺だよ？

「それでその親戚の人達は何時来るの？」

「そうですねえ」

もうそろそろ来る筈ですねえ」

「そうなの？」

じゃあ準備とか大変でしょ？ 手伝おうか？」

フェリの言葉に忍さんが答えれる。

「大丈夫ですよ

後は簡単な荷物の整理だけですからあ  
」

「そう？」

「じゃあ私達はそろそろ帰るけど、何かあったら何時でも呼んでね」

「悠夜くん、またね。」

「今度は家に遊びに来てね」

「そう言うと2人は自宅を後にした。」

「さてと……………」

「じゃあ守護騎士を召喚するか。フェリ、先ずはどうしたら良い？」

「それは簡単です！」

「悠夜の身体に魔力を流して呼び掛ければ悠夜の身体にあるアルトネリコが作動しますから」

「随分と簡単なんだね。もっと色々な手順があるのかと思ったよ」

「本来は面倒な手順を踏むのですが、悠夜の身体の中で一体化してるので話は別ですっ」

「じゃあさデバイスとしての機能は？」

「無いですねえ」

私とユニゾンするしか無いですねえ」

「やっぱりね……」

話を聞いて疑問に思ってたし、じゃあ作るしかないかな……」

「悠夜なら簡単です！

俺に作れない物などないですう」

「なんだそりゃ……」

まあ、この家には資料もあるし材料も揃ってる。  
なら何とかするしかないね……



「じゃあ始めよう……」

そう言つと俺は自分の身体に魔力を流してアルトネリコを起動させる。

くっ！？

起動させた途端、身体に物凄い魔力が流れて来るのを感じる。

それに何だ！？

この映像は！？

頭の中に崩れていく1つの大陸が崩壊していく姿が浮かぶ。

沢山の人が死に絶えていくなか、2人の少女の姿が映る。

その少女達は背中合わせに詩を唄いだす。

……綺麗な詩声だな……

自分も今まで歌手として色々な詩を唄ってきたが、ここまで綺麗で暖かい気持ちにさせる詩は初めてだ。

次第にその少女達の元に物凄い魔力が集まって行く。

次第にその魔力は天に昇って物凄い光を発した。

そうして光りが薄まって行くとそこには1つの大陸が出来上がっていた。

……これが詩魔法か

俺は初めて自分の持つ能力の凄さを感じると同時に恐ろしく感じた。

これは自分には過ぎた能力だ……

この能力は世界を救う事も破壊する事も簡単に可能にする。

俺に扱い切れるのか？

余りにも強い力に俺は不安感に苛まれた。

………とその時………

『大丈夫ですよ主………』

突然、頭に声が響いた。

………誰だ？

それに今の映像は………

『貴方が見たものは此処とは違う世界で実際に起きたもの……』

だったら尚更あんな力はいくらも自信がない……

『大丈夫です。

貴方には使えます……』

それに貴方にはこの能力が必要になります。

何故ならこれは全て決まっていた事ですから……』

それはどういう意味だ？何故、貴方に分かるんだ？

『それは何れ貴方が答えを出す時に分かるでしょう』

それって一体……

『何れまた逢いましょう。 詩魔法は貴方の心そのもの、忘れな  
いで下さい』

待ってくれ!?

貴方は……………だ……………れ……………

その瞬間、目の前が光り輝き次第に俺の意識が離れて行った。

「……………!？」

何か聞こえる……………

人の声か？

「ま……………たー!？」

この声はもしかしてフェリか……………？

「マスター！？　しっかりして下さい！？　マスター！？」

そんなに耳元で騒ぐなよ……

そんなに騒がなくても聞こえてるよ。

次第に頭のもやもやが晴れて来て、思考がクリアになる。

「フェリかい？

聞こえてるから騒がないでよ……」

「悠夜！？　気が尽きましたか！？」

「大丈夫だよ……

心配をかけたね……」

「悠夜が大丈夫ならそれで良いですう」

フェリがそう言うとニコリと微笑んだ。

「ごめんね。」

所であれからどうなったのかな？

記憶が曖昧で……」

「そうですねえ」

守護騎士達はちゃんと召喚されましたよ

本当は自分達も悠夜に付いてるって言うてたんですがリビングで待機して貰ってますう」

「そっか……」

ちゃんと召喚できたんだね。

呼んで貰って良いかな？」

「大丈夫ですよ！

今、念話しといたので

「悠夜！！？」……来たみたいですねえ

」

フェリの言葉を遮る様に『ボタン！！』と扉を開けて男女4人が入って来る。

「悠夜君！！

無事で良かったよぉ」

心配したよぉ」

「スフィール……

心配すぎ…… 悠夜があれ位でどうにかなるはずない……」

「まあ良いじゃないですか 悠くんが大丈夫なら」

えっと……

彼女達が守護騎士なのかな？

因みに最初に声を掛けて来たのが金髪の少女で見た目が10代後半位で俺にしがみ付いて良かったを連呼している。

それを嗜めたのが黒髪で両サイドを三つ編みにしている俺と同



い年位の女の子が冷静に突っ込み、微笑みながらフォローを入れたのがスフィール？と呼ばれた少女と同じ年位か少し下くらいの銀髪の少女だ。

因みに一番後ろには落ち着いた感じの20代位の男性が腕を組んでこちら眺めている。

「えー リリアちゃんだっずっとソワソワしてたじゃない！」

「そんな事ないです……スフィールの勘違いだよ……？  
気のせい、妄想、ボケたんじゃないかな……？」

「嘘だよ！！」

リリアちゃんずっと立ったり座ったりって落ち着きがなかったじゃん！」

「あれは……」

ちよつと身体を動かしていただけです。  
スフィールは妄想のしすぎで脳が腐ったんじゃないかな……？」

「むきー！？

悠夜あゝ リリアちゃんが苛めるっゝ><」

そう言うときスフィール？が泣き付いて来る。

「あははは……………」

俺は余りにも急な展開についていけないと……

「スフィールにリリア、主が戸惑っていますよ。  
先ずは挨拶が先でしょう」

今まで後ろに控えていた落ち着いた感じの青年が2人に話しかけた。

「あつ！！」

ごめんね！ 私の名前はスフィール、悠夜の守護騎士さんで皆のリーダーなんだよ！」

「私はリリア……

悠夜の奴隷なんだよ……

あの馬鹿の事は気にしないで……」

「あたしはシュレリアです！ 悠夜君宜しくね」

「最後に僕ですね。

僕はフィルスと云います。御身は主の為に……」

……あれ？

リーダーって彼じゃないんだ……

あの何となく頼りなさそうな金髪の彼女がリーダーなんだ……

「悠夜……

その疑問は間違っていないよ……

スフィールは馬鹿だから……」

「リリアちゃん……？」  
それはどういう事かな？」

「どうも何も本当の事を言っただけだよ……？」  
皆もそう思うよね……？」

リリアがそう言っているとフェリを含めた皆が苦笑いしながら明後日の方を向いた。

「みんな酷いよぉ」  
悠夜はそう思ってないよね！？」

「えっと……ごめんね。俺はまだよく分らないんだけど……」

「良かった  
悠夜は私の味方だね！」

「スフィールはやっぱり馬鹿でアホですね。  
悠夜の言った事を聞いてないよ?」

リリアって結構、毒舌だね……

「リリアちゃんは神経質なんだよー      そんなだと悠夜に嫌われちゃうよぉ」

「むっ……!？」

そんな事はないよ……  
悠夜は気にしないよね?」

また喧嘩が始まった……

「ねえ……喧嘩はしないでくれるかな?  
俺達はこちらから一緒に暮らしていく家族なんだからさ。  
仲良くしようよ」

俺がそう言うと2人は仲良く「はい」と返事してくれた。

こうして俺に新しい家族ができ、新しい生活に向けて騒がしく、  
それでいて楽しく始まった。

## 第5話（後書き）

次回はオリキャラの設定を出す予定です。

もしかしたらネタバレとかもあるかもしれませんがそれなのでそれが嫌な人は気を付けて下さいね。

## オリキャラ設定（前書き）

まさかデータが消えるとは……

遅くなつてすみません。

今回は設定となっており自分の独自の解釈と設定となっておりますので、ご容赦下さい。



## オリキャラ設定

名前：月神悠夜

年齢：6歳（23歳 転生前）

生年月日：1月22日

性別：男

血液型：A B型

星座：水瓶座

身長・体重：116cm

23キロ（187cm 68キロ 転生前）

C・V：？

歌声イメージ：志方あき

他多数

魔力ランク：SS+（リミッター時はAAA+アルトネリコ発動時は測定不能）

髪色：銀髪

瞳：紫色

容姿：FFのカダージュの髪が長い感じ

中性的で女性に間違えられることが多い。男女ともに物凄くもてる

性格：基本的に落ち着いているが天然な所がある

楽器とか弄ったり曲を書いたりする時は時間を忘れて没頭する恋愛事には鈍感ではないが余りにも人気があつたため抜けているところがある。

デバイス：ユニゾンデバイス”フェリ”     アルトネリコ（悠夜の

体内に埋め込まれていて通常のデバイスみたいには発動出来ない）

特技・趣味：料理、読書、楽器演奏、作曲、小麦粉をちねって米を作る（笑）

好きな物：激辛系の食べ物、歌う事、楽器全般、皆の笑顔     ファンサービス、知識を養う事

嫌いな物：牡蠣、遅刻、ドラマの収録、約束を破る事、無人島生活（以前の収録で一緒になったある芸人が理由）     ヤンデレ（本人は気付いていないが死ぬ間際のアレが原因か）

スキル関係：詩魔法、時空開閉（王の財宝みたいな感じ） 魔法の才能（全ての魔法を扱う事が出来る）  
道具の知識（色々な道具を使ったり使用出来る）

他にもあるが不明

オリジン：詩魔法を紡ぎ発動出来る人種をレーヴァテイルと言いオリジンはその中でも特別で18歳程度で成長が止まり、生命維持が塔によってなされるので崩壊しない限りは永遠に生き続ける。

他の特徴として能力が非常に高い。

本来、レーヴァテイルは女性しかいないのだが女神に無理矢理に改造された（笑）そのせいか容姿が女性ぽくなった。

インストールポイント：本来は他のレーヴァテイルが生命維持に必要な延命剤を打ち込む為にあるポイントなのだが悠夜とインフェルス達は魔力を回復するために使う。それぞれポイントが違う。  
悠夜のポイントは脇腹。

備考：転生前はその世界でトップアイドルだった。優れた容姿に楽器演奏、更には天使の歌声と呼ばれる程の美声で圧倒的な人気を誇った。

……が本人は自然体で人が自然と集まる不思議なカリスマがある。知能や運動神経も素晴らしく、転生前から完璧人間といわれていた。背中には生まれた時から不思議なアザがある。

## 詩魔法について

レーヴァテイルと云われる人種が自分の心で詩を紡ぎ発動する魔法。悠夜はその中でも特別なオリジンと云われる人種でその威力は比較にならない。

## アルトネリコについて

詩魔法を管理している塔であり、全ての詩魔法がそこには収められている。

その魔力は甚大であり世界を簡単に崩壊出来る程であり、無理矢理に取り出すと世界は滅ぶ。

デバイス扱いになってはいるが武器やバリアジャケットは精製出来ず、魔力の源、詩魔法のサーバーみたいな役割となっている。

名前：月神フェリ

年齢：不明

生年月日：7月4日（本来は不明だが悠夜が無いのは可哀想との事で出会った日を誕生日にした）

血液型：？

星座：双子座

身長・体重：30センチ位（変身時は132センチ位）体重は……  
「秘密なのですよ」

C・V：堀江由衣さん

歌声イメージ：ほぼ一緒

魔力ランク：A A +

髪色：堇色

瞳色：空色

容姿：イメージはスパイラルの竹内理緒ちゃん、喋り方は某あうあう神

性格：天真爛漫だが時々、黒い。

普段は子供みたいだが意外と大人な意見を言う時もある。

デバイス：ストレージデバイス

『セイクリッドティア』

魔道書型のデバイスであらゆる魔法が書かれており、アルトネリコから詩魔法を引き出す事も可能である。

魔法形式：古代ベルカ式、ミッド式、詩魔法

魔力光：白色

魔力資質：不明

特技・趣味：未定（生まれたばかりのため）  
だが唄う事と料理にはまっているそうです。

好きなもの：マスター、マスターの料理と歌、甘い物、お昼寝、家族、ノアお姉さま（笑）  
フェリ「これは公式設定ですう」

嫌いな物：マスターをいじめる人、人を傷付ける人、お昼寝を邪魔する人（フェリ「私の眠りを妨げる人は嫌いですう……マスターは別ですよ」）

スキル：不明

インストールポイント：フェリ「私のポイントは腕です」

備考：悠夜のユニゾンデバイスであり、アルトネリコの管制人格である。

悠夜は原作の知識がないがフェリは少しだけあるようだ。  
魔法の知識もあり悠夜に教えている。  
最近のマイブームは料理と歌う事みたいだ。

名前：月神スフィール

年齢：不明（見た目は17歳位）

生年月日：12月24日（本来は無いのだから悠夜の提案でそれぞれ作った。スフィールは何故かこの日を大熱望して決まった）

性別：女性

血液型：不明

星座：山羊座

身長・体重：163センチ体重は笑いながら殴られたため不明……

C・V：平野綾

歌声イメージ：一緒

魔力ランク：SS

髪の色：金髪

瞳の色：碧眼

容姿：アルトネリコに出るオリカがイメージ

性格：清く正しくそして馬鹿（笑）  
基本的に能天気で天然。



デバイス：アームデバイス『ハインズフェイト』魔力を通す事で  
ムチ状の魔力を発する

A・Iは女性型で待機状態は腕輪

魔法形式：ベルカ式

魔力光：赤

魔力資質：不明

特技・趣味：編み物、料理（意外とかゆくな！？ スフィール）  
十秒で寝る

好きな物：勿論、悠夜だよ  
スポーツ全般、お笑い番組音楽関係

嫌いな物：自分を馬鹿という人、ゴキブリ外人（英語が喋れないため暴走する）

スキル：野生の感（戦闘では頭を使う事が苦手で感が物凄く発達した） 絶対お馬鹿解答（本人は真面目に答えるのに必ず天然発言になる） 後はまだ不明

インストールポイント：スフィール「えー あたしのポイントが知りたいの〜？……しょうがないなあー 悠夜にだったら教えてもいいよー あっ！でもその前にさあー」以下、関係ない話しが三時間続いたので省略。 ポイントは背中

備考：悠夜のアルトネリコの守護騎士『インフェルス』の一応リーダー

天然ボケで愛すべき馬鹿なのだか実力はトップクラス悠夜至上主義で頻繁にリリアと喧嘩をしている。

何故、彼女がリーダーなのかは月神家の七不思議に認定された（笑）

名前：月神リリア

年齢：6歳（実年齢は不明）

生年月日：1月22日（本人が悠夜と同じ日にこだわったため）

性別：リリア「女に決まってる……そんな事を聞くななんて頭が腐ってるんじゃないかな……？」

血液型：不明（リリア曰く私の体は悠夜で出来ていると発言）

星座：水瓶座

身長・体重：106センチ20キロ（本来はスフィールと同じ位の体型なのだが悠夜と同じ年齢の方が一緒にいられるためにこの体型になった）

C・V：宮崎羽衣

歌声イメージ：基本的に一緒

魔力ランク：A A A +（ヤンデレが発動した時は不明）

髪の色：黒髪で両サイドでツインに結んでいる

瞳の色：黒

容姿：アルトネリコにでるミシャがイメージ

性格：基本的に無口で冷静だが悠夜の事を病的なまでに愛し、初めての挨拶が私は悠夜の奴隷宣言と危ない発言をしたが、他の人に対しては素っ気なく悠夜には甘えたりと色々と危険な少女、悠夜に女が近づかないようにこの姿になったりと色んな意味で危険？な幼女

デバイス：

『ソウルスレイヤー』

全長2メートルくらいの大鎌型のデバイス  
基本的に接近戦がたの機能になっている。

A・Iは男性型で待機状態は髪飾り

魔法形式：古代ベルカ、詩魔法

魔力光：漆黒

魔力資質：不明

特技・趣味：尾行、悠夜の観察、読書、悠夜に近づくやつの抹殺（笑）

好きなもの：悠夜の全て、水羊羹

嫌いな物：悠夜に近づく物全て（家族は我慢する） スフィール（笑）（何故か馬が合わないらしい） ピザの先っちょ

スキル：詩魔法、リリアゾーン（悠夜に誰かが近づいたら何処からともなく現れる。半径3キロ位が範囲内）

インストールポイント：リリア「それを知って良いのは悠夜だけ……」

備考：守護騎士『インフェルス』が誇るヤンデレちびっこ騎士。  
悠夜以外はいつでもよく何時も悠夜にくっ付いている。

設定上は悠夜と双子という事になる。  
基本的に戦闘や普段の生活では大人しく無口なのだが悠夜の事になると残酷で狂気的な態度になる。

他の守護騎士に対しても「悠夜には私が居れば必要ない……」と公言してるが、嫌っているわけではない。

名前：月神シュレリア

年齢：不明（見た目は15歳位）

生年月日：5月12日（理由はたまたま家にあった雑誌で水瓶座との相性が良いのが牡牛座だったため）

血液型：不明

星座：牡牛座

身長・体重：153センチ、体重は涙目で睨まれたため割愛。

C・V：後藤麻衣

歌声イメージ：無

魔力ランク：A A A

髪の色：銀髪のストレート

瞳の色：灰色

容姿：イメージはアルトネリコに出るシュレリア様のまんま……考  
えるのが面倒になった訳ではないですよ（汗）

性格：真面目で素直で一番まともな性格をしている。普段はしっかりしているのだがとんでもない方向音痴で自宅で迷子になっている。悠夜にはだけは甘えたりするが、スフィールとリリアの争いが激しいため目立ってない……

デバイス：アームドデバイス

『シャドウビュレット』

銃型デバイスで遠距離、中距離、近接と全てに対応でき、魔力をレーザーのように発射する。

A・Iは女性型で待機状態は指輪になっている。

魔力形式：ミッドとベルカのハイブリッド式

魔力光：黄色

魔力資質：雷、炎

特技・趣味：ぬいぐるみ収集、お料理、ゲーム、楽器演奏

好きなもの：家族、悠夜、可愛いもの、ドラ エ、散歩

嫌いな物：ところてん、迷子、ミミック、改造プレイ（こだわりの  
ゲーマーの為（笑））、連コイン

スキル：詩魔法、絶対方向音痴（彼女が1人で出掛けたら帰って来る事は無いであろう……）ゲーマーのプライド（強そうな人を見付けたら対戦しなくてはならない。そう語った彼女の横顔は凜々し



かった……)

インストールポイント：お腹

備考：騎士達の中ではまともな性格をしているが、のりは悪く無い。基本的に何をやっても直ぐに覚えたりと優秀なのだが突出しているのが射撃とゲームの腕と方向音痴のレベルだけ……  
器用貧乏な所があるが悠夜にはとても大切にされている。  
生粋のゲーマーであり暇があればゲームをやっており、ゲーム全般が好きで彼女の信念は改造はゲームにあらずと語っている。

名前：月神フィルス

年齢：二十代前半くらい

生年月日：11月20日（ダーツで決めた）

性別：男

血液型：不明

星座：蠍座

身長・体重：180センチ86キロ

C・V：森川智之

歌声イメージ：歌わない為無し

魔力ランク：不明

髪の色：茶色

瞳の色：ダークブラウン

容姿：スパイラルの鳴海清隆がイメージ

性格：落ち着いた大人の男性みたいだが、何処か掴み処の無い感じがある。

デバイス：不明

魔法形式：不明

魔力光：不明

魔力資質：不明

特技・趣味：実験、読書、研究

好きなもの：実験、改造  
家族

嫌いな物：他人に詮索される事

スキル：不明

インストールポイント：無し

備考：インフェルスで唯一の男性で普段は研究者みに白衣を羽織っている。

戦闘スタイルなどは不明で参謀や指揮などをとっている。

落ち着いた知性的な話し方をするが家族以外は研究対象としてみていて何処か掴めない感じがする。（サイバスターに出るシユウみたいな感じ）

普段は自宅や別荘の研究室にこもりデバイスや魔法関連の研究をしている。

シユレリア曰く彼は敵にしていけないと語った。

何故か彼が怒るとダークプリズンが何処からともなく響いてくるらしい……

## オリキャラ設定（後書き）

次回はなるべく早く投稿するよう頑張ります！

また次回にお会いしましょう！

## 第6話（前書き）

忙しくてなかなか進まない！！

でも頑張ります！！

## 第6話

「ん……  
ふわ……朝か……」

カーテンの隙間から朝日が射している。

「えっと……  
時間は……6時か。そろそろ起きないとね……」

そう呟き体を起こそうとすると、ムニッと体に何かが当たった。

「？何か当たった？  
………リリア？」

そうベットの中を覗いてみるとそこには黒髪の少女が自分にしがみ

付いてぐっすりと眠っている。

「またか……」

リリアも俺ばかりに甘えないでスフィール達にも甘えれば良いのに……」

あれから俺の守護騎士『インフェルス』の皆とは家族として一緒に暮らしている。

皆もすっかりここでの暮らしに馴染み楽しそうな毎日を過ごしている。

リリアは特に自分の誕生日を自分と一緒にする程懐いてくれている。

「嬉しいけど、皆にももっと甘えてくれればいいんだけどね……」

俺はリリアの頭を優しく撫でながら呟く。

リリアは一応、俺とは兄妹のような形になった。

俺には凄く懐いてくれるのだが、他の家族はともかく他人とは全然関わろうとしない。

リリア曰く「私には悠夜だけが居れば良いの……」だそうだ。



「こればかりは少しずつ慣れていって貰わないと無理かな……  
まあ、ゆっくりいこう…」

俺はそう呟くとリリアを起こさないようにゆっくりとベットから抜け出すと朝食を作る為にキッチンへ向かった。

「おはようございます！悠夜くん」

俺がキッチンで朝食の準備をしてるとシュレリアが声をかけて来た。

「おはよう。シュレリア！今日は早いね？  
昨日はゲームしなかったの？」

「昨日は予定より早くクリアしたので早く寝れたんですよ 目標のアイテムも一発でゲットしましたし あっ！手伝います！」

そう言つとシュレリアは手を洗いエプロンを着て俺の方にやって来る。

「ありがとう！」

じゃあ味噌汁を任せて良いかな？

その間に玉子焼きを焼いちゃうから」

「任せて下さい！」

美味しく作っちゃいますよ」

シュレリアはそう言つと冷蔵庫から豆腐や葱を取り出す。

シュレリアは忍さんの影響かすっかりゲーマーになってしまい普段は寝るのが遅く起きるのはもっと遅い。

それでも彼女はちゃんと自分で起きて手伝いをしたりとしっかりしている。

俺はそう考えながら玉子を少しずつフライパンに流して形を整えていると……

「ねえ、悠夜くん？」

シュレリアが鍋をお玉で掻き混ぜながら話し掛けてくる。

「どうしたの？」

「えっと……えっとですね……」

俺が玉子をひっくり返しながら答えるとシュレリアは口をモゴモゴとしながらえっとを繰り返している。

「？どうしたのシュレリア？」

「えっと……」

こうして2人並んで料理していると仲の良い新婚さんみたいですわね／  
／／／

シュレリアはそう言つと潤んだ瞳でこちらを見て来る。

「シュレリア……」

「悠夜くん…… / / /」

「シュレリア…… 後ろ……」

「悠夜くん…… って後ろ？」

「……………」

そこには無言でシュレリアを睨み付けながらソウルスレイヤーを突き付けているリリアがいた。

「リ、リリア!？」

何時の間に!？ ……………それよりもそれをどかしてくれない?!」

シュレリアは慌てながらリリアに話しかけているがリリアは無言で首を振る。

「駄目……」

私に黙って悠夜に近づく女は潰す……  
覚悟は出来たかな……?」

リリアはそう言つとソウルスレイヤーに魔力を通して魔力刃を形成し始める。

「ちよつ!？」

悠夜くん!! 助けて下さい!？ リリアがまた暴走してますよ!」

涙目になりながらシュレリアは俺に訴えてくる。

(…………この状態のリリアは何故か苦手なんだよね…………)

俺は内心、溜め息を付くとリリアに近付いて頭を撫でる。

「リリア……これくらいにしようよ。  
もう朝ご飯も出来るしさ……」

そう言っただけで頭を優しく撫で続けると……

「ん

わかった…… 悠夜がそう言うなら見逃しあげる…… シュレリア……  
……？  
次は無いからね……？」

リリアは目を細めながら嬉しそうに返事をする。シュレリアに冷たく言い放つ。シュレリアはひたすら頭をコクコクと降り続ける。

（今日は簡単に済んで良かった……）

以前、スフィールと喧嘩になった時は普通にこの家が吹き飛ばしそうになったのを皆で必死に止めたのを思い出す。

その際、海鳴市で震度3の地震が起きたのだが……関係無い……  
… 筈……

その後リリアも手伝ってくれた事もあり朝食の準備も直ぐに終わった。

「では、頂きます」

「……頂きます!」

こうして皆で食べるご飯もすっかり馴れたな……

自分もはやて程ではないが複数で食事を取ったり家族で集まる事も殆ど無かったので今の環境はとても暖かくそれでいて何処かくすぐつたい気持ちになる。

「うまつまですう」

マスターが作るお料理はやっぱりサイコです」

「フェリちゃん?!」

それは私の玉子焼きい」

「早い者勝ちなのですよ」

「あんまり喧嘩しちゃ駄目だよ。フェリも落ち着いて食べなよ」

騒がしく喧嘩するフェリとスフィールを宿めるシュレリア……  
だが……

「（ひよいばく、ひよいばく、ひよいばく……）」

「あゝ!？」

リリア、それ私の!？　ってか食べるの早いよ!」



「油断大敵……」

悠夜の作った物は全部、私の物……」

宥めていたシュレリアの皿からリリアが電光石火の速さで玉子  
焼きを強奪して結局、喧嘩になる……」

「フィルス……」

賑やかだね？」

「そうですね。主」

それを自分とフィルスが微笑みながらそれを眺める。  
とても暖かい光景だった。

「さてと……」

じゃあそろそろ今後の事について話そうか？」

食事が終わり皆でのんびりとお茶を飲んでる時に俺は話し始める。

皆も真剣な顔になって俺の方に顔を向ける。

「そうですね」

マスターも含めて今の生活にも馴れましたし、マスターの特訓の方も上手くいってますし、そろそろ良いかもですね」

フェリが言うと、スフィールもそれに続く。

「それで悠夜はどうするの？ 私達は悠夜に付いて行くよ」

「ていうか、スフィールに頭を使わせても無駄……」

「リリアちゃん……  
ストレートだよ……」

リリアはそれに突っ込みシュレリアは苦笑いを浮かべる。  
因みにスフィールは気付いて無いのかのほほんと笑っている……

「あはは……」

取り敢えず先ずは自分が考えていることを話すよ。  
構わないかな？」

と皆に問いかけると皆、笑顔で頷いてくれた。

「海鳴市に来て二週間になるね。今まで情報収集とか訓練に当  
てて解った事として先ずは管理局の在り方だけど……」

そこで俺は一旦、話を止めて皆の顔を見回して見る。

そこには失望、悲しみ、怒り、嘆きといった表情が浮かんでいる。  
多分、俺自身も似た表情を浮かべているだろう……

「正直言って腐ってる…… あれだと自分達の価値観が全て正し

いと妄想してるし、全てが腐ってる訳じゃないけど自分達がどれだけの哀しみを生み出しているのか気付いてさえない……」

俺はそう言うところの二週間で調べた事を頭に浮かべた。

汚職塗れの上層部、違法な実験に手を貸す者、自分達の勝手な正義により家族を失って泣き叫ぶ子供達……他にも様々な事が頭によぎっては消える……

俺は怒りで頭に血が上っていくのを感じて慌てて感情を押し殺す。

（くっ！？ 落ち着け！！今怒っても何も解決なんかしない！  
冷静に考えるんだ！！）

俺は一旦、深呼吸をして呼吸を整えると話し出す。

「とにかく、今の管理局は自分達の勝手な正義によって哀しみを生み傷ついている人達が数え切れない程いるのが事実……それを何とかしたいと俺は思っている」

「悠夜どうする……？  
潰す……？」

リリアの問いに俺は静かに首を振る……

「それは駄目だよ……  
それだと今の管理局がやってる事と一緒にになる。  
それにその選択をするとまた新たに傷つく人が出てくる……  
俺達は俺達のやり方で管理局を変えていきたい」

「そうだね！  
私達には私達のやり方があるんだよー！」

「スフィール……  
意味分かってないでしょ……？」

元気に答えるスフィールに冷たい視線を送るリリア……

「リリアちゃん酷いよぉ」

私はそんなに馬鹿じゃないんだよ!？」

「「」.....「」」

スフィールがそう言うと言つと皆は一斉に冷たい視線を彼女に送つた.....  
俺は.....ノーコメントで.....

「みんな酷いよ!？」

私は馬鹿じゃないもん!!悠夜は私の味方だよね!？」

「.....あ、ああ!

スフィールは馬鹿じゃないよ!  
ちよつと天然なだけだよ!!」

「ほんと!？」

やつたぁ　　やつぱり悠夜は私の味方だね」

良いのか……スフィールよ？

皆の視線が哀れみの物に変わってるのに気付いてないし……

「コホン！

では主はどう動きますか？正直いつて内部から変えていくのはとても困難ですよ？

私達には後ろ楯ありませんし……」

フィルスが仕切り直しに訊いてくる。

「そうだね。確かに俺達には後ろ楯が無い……」

普通に管理局に入局しただけじゃ何時になるか解らない……」

「どうしますかマスター？早く何とかしないと苦しむ人が増えていきますよ？」

フェリが哀しそうな表情を浮かべながら尋ねてくる。

「うん。だから後ろ楯を作る事と平行してやってみたい事があるんだ」

「？悠夜…… やってみたい事って？」

「まだ内緒。ただ1つ言えるのは俺にはそれしかないからね……  
まあ、今は管理局に入局する事と後ろ楯を作る事を目標にして行くか？」

俺の一言で締めくくり第一回家族会議が終了した。

「さてと……」

少し散歩でも行っ て来ようかな……」

今日の訓練は昼からだし天気も良いし、少しのんびりしようかな？



本当なら朝から訓練したりフィルスと一緒に俺のデバイスを作成したりと何かと忙しいのだが、先日フェリにたまには休んで下さいと訴えられた。

最初は断わろうとしたのだがフェリは涙目で睨みスフィールやシュレリアにも笑顔で却下され、リリアに至っては縄を片手に怪しい笑みを浮かべていて俺は冷や汗をかきながら頷くしかなかった。

「マスター」 どちらにお出掛けですかあ？」

「ん？ 特に決めてないよ？ 少しのんびりと歩きたいだけだし」

「そうなんですか？  
フェリも一緒に行っても良いですかあ？」

「構わないけど……」

フェリって今日の掃除当番じゃなかった？」

俺がフェリに尋ねるとフェリはシマツタって表情を浮かべて「忘れてましたあ……」としょんぼりしてしまった。

その後、皆も付いて行く！と騒ぎになり結局、じゃんけんでスフィールが勝ち他の皆が悔しそうな顔を浮かべてるなか上機嫌なスフィールと散歩に出掛ける事になった。

「ん〜

良い天気だね〜 風も気持ち良いしお散歩地獄ってのはこのことだねー」

「……スフィール、お散歩日和だから……」

と2人で他愛もない雑談をしながらのんびりと海鳴の町並みを歩いて行く。

途中で俺が初めてこの世界に来た公園が見えた。

「あつ、スフィール、ちょっとそこの公園に寄っても良いかな？」

「良いよ」

スフィールに了解を取ると俺達は公園の方に足を向けた。

Side

「パパとママの馬鹿!!」

私はそう言つと屋敷を飛び出した。

今日は久し振りにパパとママの仕事がお休みで今日は皆でお買い物に行こうつて約束してたのに……

「うゝ!! パパもママもだいつきらい!!」

私は感情を剥き出しにして怒りを現しながら走ってる。

自分でも何処に向かっているかなんて考えもせずただがむしやらに走って感情を爆発させる。

だけど何時までそれが続く訳もなく、息が切れて体もふらふら

して来ている。

幸い、すぐ近くに公園があったので少し休もうと公園のベンチに座る。

ベンチに座わると体の力が抜けてぐったりと体を休める。  
次第に息も落ち着きだんだんと頭に血が上っていたのも落ち着いてくる。

「パパ……ママ……」

冷静になってくると先程の自分の言葉が胸に刺さってくる。

「パパとママに酷い事を言っちゃった……」

普段はとても穏やかで優しい両親の顔を思い浮かべる。  
何時も私のわがままを困ったようにそれでいてどこか嬉しそうな顔

をして聞いてくれるパパとママだけど先程はとても哀しそうな顔をしていた。

「……………ひっく、パパ…………ママ……………」

もしかして嫌われちゃったかな…………  
わたし、本当はパパもママも大好きなのに…………

だんだんと不安になってきて私の眼から涙が溢れてくる。

「う……………う……………ひ……………っく……………ぐす」

ついに私の我慢も限界になり泣き出してしまつ。

「……………うめ……………うめんなさい……………だからきらいにならないで……………」

そうして泣いていると独りでいるのが不安になり更に哀しみが増してきた。

「パパ……………ママ……………」

わたしは何であんなことを言ってしまったんだろう？

パパもママもいつも忙しいのにわたしに優しくしてくれてるのに……

後悔と不安と悲しみで胸が張り切れそうになっていると……

~~~~~

何処からか美しい歌声が響いて来る。

「ひつく……………ぐすつ……………？ 綺麗な声……………」

わたしはその綺麗な歌声にすっかり泣いていた事を忘れてふらふらと立ち上がり、と歌声が聞こえる方に向かって行った。

「どこだろう……」

「こっちから聞こえるんだけど……」

よく耳を傾けてみると高台の方から聞こえてくる。

わたしは走り出して向かった。

「っ！！！？」

そこには美しい銀髪を風にたなびかせてまるで祈るかのように目を閉じて歌うとても形容しがたい美しいものが存在した。

Side OUT



「悠夜Side」

「綺麗な公園だね

海が見えるし広いし、風が気持ちいいや」

スフィールは上機嫌でくるくる回りながら話しかけてくる。

「そうだね。

何だかんだですつと訓練とかデバイス作りに没頭してたからこんなに気が休まるのはこっちに來て初めてかな……」

「そうだよ」

悠夜って色々やり過ぎなんだよ」

訓練にデバイス作成、更に調べ物とかアイテムの研究とか無理しすぎ！」

「うつ！？ 反省するよ…… でも色々と調べてみてさ、何だか

自分が何とかしたいって気持ちが強くなっちゃってね……」

俺がそう言つとスフィールはクスクスと笑い出し

「もう悠夜はあゝ」

自分でも言つてたじゃない人間は完璧じゃない。物事を善と悪で区切るのは無意味で人1人で出来る事は余りにも少ないって」

「あはは…… そうだったね…… 意気込み過ぎたかな？」

尋ねるとスフィールは偉そうにウンウンと頷いてる。

……何だか構いたくなる顔だね……

「それにしてもさ？」

俺が改めて問いかけるとスフィールは首を傾げる。

「スフィールが俺の言ってた事を憶えていたのには驚いたよ……」

真剣な表情を俺は浮かべてスフィールをからかってみると……

「ひどいよー!？」

私はそんなに馬鹿じゃないもん!！」

途端に頬を膨らませて反論してくる。  
……しかし

「そんなに?」

聞き返すと顔を真赤にして

「むゝ！？ 悠夜の意地悪うゝ」

すっかり拗ねてしまった（笑）

「ごめんごめん。ちょっとからかい過ぎたよ。  
お詫びに何か言う事を聞くから許してよ」

そういつとスフィールはすっかりと機嫌を直した。

「本当！？

じゃあねえゝ うゝんと……………そうだ！！ 歌が聴きたい！！」

「歌？」

「うん 歌 最近では詩魔法ばかりで普通の歌は聴いてない  
し……………」

悠夜の歌が聴きたい！！」

「歌か……」

そういえばずっと歌ってないな……

……うん。良いね！」

最近は忙しくてずっと歌ってない事を思い出して応える。

「えへへ 決まりだね じゃああの高台の所にしよ！」

そう言つと俺の手を掴み走りだす。

「そんなに慌てなくても良いんじゃない？！」

「だって早く悠夜の歌が聴きたいんだもん」

と聞く耳を持たなかった……

「全く…… 流石に全力疾走して直ぐに歌える訳ないでしょ…  
…」

「あはは……ごめんね……」

流石にちょっと走った位で息を切らす程、弱ではないがもうちょっとと落ち着かせて欲しい。

「ふー さてと……  
じゃあ歌うよ?」

そう言つとスフィールはうん!と元気よく応える。

「聴いて下さい。私の想いを……」

何時ものように呟くと俺は歌いだす。  
自分の想いを……

「 静かな      この夜に

貴方を待っているの

あれから      少しだけ時間が過ぎて

思い出が優しくなったね

星の      降る場所で      貴方が笑っていることを

いつも願ってた      いま孤独でも

また逢えるよね？」

歌い終わると周りから凄い拍手が贈られてくる。

「え！？ 何だか人が沢山居る……」

何時の間にかスフィールだけでなく沢山の人が集まって涙を浮かべながら拍手をしている。

「何時の間に……」

「悠夜が歌い始めたら何時の間にか集まって来たんだよ  
やっぱり悠夜の歌は良いよね」 優しく暖かくてどこか寂しい  
感じがしてさ」

「そう？ ありがとう 久し振りに歌ったから気持ち良いよ！  
……ん？ あの子は……」

ふと見ると直ぐ傍に同じ年位の金髪の女の子がもじもじとしていた。



「大丈夫？　どうかしたのかな？」

尋ねてみとその子はこちらを見上げ言った。

「あ、あ、あんた！？　私の婚約者にしてあげるわよ?!」

「……………は？」

「えゝ!？」

突然の彼女の宣言に俺とスフィールは驚きの声を上げるのだっ  
た。

〕NEXT〕

## 第6話（後書き）

えゝ 因みに作者は某魔王を嫌っているわけじゃありませんよ（汗）

何というか……

もっと引つ張れ！！と電波が！！

？「ふざけるなの！？ 普通、あそこで公園って私なの！！」

ではまた次回ゝ

？「無視しないで！！  
そっいうネタははやてちゃんの役目なの！？」

……………サラバゝ

## 第7話（前書き）

お待たせいたしました！！

すいません……

色々と忙しくてそう仕事とかゲームとかゲームとかゲームとか……

すみませんしたー！！

## 第7話

） Side ）

そこには美しい少女が……

いや着ている服は男物だし少年かな？

ともかく私と同じ年位の子が目を閉じて気持ちよさそうに歌っている。

（なんて綺麗な声なんだろう……）

その歌声はとても美しく、まるで祈るかのように歌う姿はどこか神々しくどこか消えてしまいそうな儚なさを感じた。

私はさっきまで悲しかったのも忘れてその歌に吸い込まれていた。

そして歌い終わるとその少年は静かに目を開けると周りを見回す  
と少し驚いた表情を見せたがすぐに微笑みペコリと頭を下げた。

何時の間にか私の他にも沢山の人が集まり笑顔で拍手をしている。  
る。

（すごい……　こんなにたくさんの人がいつ来たんだろう？　それにみんな笑ってる……　あの子凄いいよ！）

私は気付くと彼のすぐ傍まで近づいていた。

彼は私に気付くと一瞬、びっくりした表情を見せたがすぐに微笑み私に優しく声をかけてくれた。

その表情と優しい声を聞いた瞬間に私の頭は一瞬で血が上り何も考えられなくなり私は咄嗟に話しかけた。

「あ、あ、あんた！？　私の婚約者にしてあげるわよ！？」

） Side END ）

何？ この展開は……

俺の目の前には顔をこれ以上なくらいに真っ赤にした金髪の少女が俯いている。

良く解らないけど興奮してて言いたい事が言えないのかな？

……ほら、その子もだんだんと落ち着いて来たのか顔を真っ青にしてあわあわしている。

（とにかく落ち着かせないとね）

俺はそう思うとその少女の頭をゆっくりと撫でながら話し掛けた。

「大丈夫だよ……」

だからゆっくりと深呼吸してみよっか？」

そう言つと少女はびっくりしたように俺の顔を見ると顔をまた真っ赤にするとコクコクと頷いて深呼吸をし始める。

「もう大丈夫？」

俺が問いかけると少女はまだ赤みの残る顔をしながらも答えてくれた。

「う、うん。大丈夫……迷惑かけたわね……」

やっぱり恥ずかしかったのか少女はどこかぶっきらぼうな口調だ。

「ちょっとびっくりしたけど、気にしないで良いよ？ 僕も君みたいな可愛い子がお嫁さんなら嬉しいしね？」

俺がそう言つと少女はボンと音を立てて顔を真っ赤にする。

（からかいすぎたかな……）

そう思つてると少女は勢い良く顔を上げると潤んだ瞳でこちらを見てくる。

（やり過ぎた……）

スフィールは物凄い目つきでこっちを睨んでるし……空気を変えな  
いと……）

「あはは……恥ずかしい思いをさせてごめんね？

所でお名前を教えてくださいかな？

僕は月神悠夜っていうんだ」

「あつ！　あたしはアリサ！　アリサ・バニングスっていうの  
よ……」



少女……いやアリサは慌てた感じだった。だが答えてくれた。

「アリサちゃんか……」

良い名前だね！ 改めて宜しくね」

「う、うん／＼／＼」

よ、よろしくしてあげてもいいわよ！？」

面白い子だね、アリサちゃんは。

そう思っているとスフィールも自己紹介をしていた。

「私は月神スフィールだよー 悠夜の姉です  
宜しくねアリサ・バーモ ドカレーちゃん」

「ちがうわよ！？」

わたしはアリサ・バニングスです！  
カレーじゃないわよ！！」

「違った〜？」

えーとルズ・なんちゃらちゃんだったね」

「違うー！！」

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ！  
」？」

「そんなに長い覚えられないよー」

「ふざけんじゃないわよ！？ この馬鹿犬！！………ってなにやらせるのよ！？ 私はア・リ・サ・バ・ニ・ン・グ・スって言うてるでしょ！！？」

「アリサ・バーニングスパンチだね？ 覚えたよー！！」

「ちつがああう！？」

あんたケンカ売ってるの！！？」

「え？ 何か買ってくれるの！？ ありがとう」

何時まで続くんだ？

これ……？

《スフィールはアリサマスターとなった！！》

あの後、30分は続いた漫才を俺は何とか終わらせ改めてお話しをした。

「悠夜のお姉さんって凄いわね……  
色んな意味で……」

「あはは……  
悪気はないから気にしないでくれると助かるよ……」

「ええ……まともに相手をするのもつかれたわ……」

「なになに!？」

何の話し？」

「「何でもない……」」

スフィールの発言に俺とアリサは疲れた返事を返す……

「ふーん……」

そういえばさアリちゃんは悠夜に何か用だったの？　ずっとこっち見てたしさあゝ」

スフィールはふと思いついたのかアリサちゃんに訊いてきた。  
そういえば、漫才で忘れてたけどアリサちゃんは何か用がある感じ  
だった……

「アリじゃない！！　ってえっ！？　え、えーと……ゆっ悠夜の歌声が綺麗だなぁ　って思ってた悠夜を見てたらね？　なっ何だか胸がどきどきしてもっと近くで見たいなぁ……  
て思ってたらしいの間にあんな近くに／＼／＼」

成る程……　そんなに俺の歌を気に入ってくれたのなら嬉しいな……  
……  
久し振りに気持ち良く自分の好きに歌えたから……

「ありがとねアリサちゃん。　僕の歌をそんなに気に入ってくれて嬉しいよ」

「へ？　あっそうなの！　わたしこんなに綺麗な歌声は初めて聴いたのよ！  
べっ別に悠夜の事が気になった訳じゃないからね！？」

えっと……これって確かツンデレだっけ？  
何か微笑ましいね。

「そっか……僕はアリサちゃんと友達になりたかったんだけど、

それなら仕方ないよね……  
スフィール……帰ろうか……」

俺がそうスフィールに話し掛け、帰ろうとするとアリサちゃん  
は慌てて引き止めて来た。

「ちよっ！ちよっと！！ まっまま、待ちなさいよ！？  
っ別にわ、わたしはそんなつもりじゃ！！」

べ

「スフィール……  
今日のお昼は何を食べようか……？」

「そうだね  
ラーメンが良い！！」

「オッケー！  
じゃあスーパで買い物して行こう」

そう言つて公園から立ち去ろうとしたらアリサちゃんが回り込んで来て逃げられなかった……

「ま、待ちなさいって言ってるでしょ!？」  
「かつてに帰らないで!！」

「じゃあ素直になろうか？ 言いたい事はちゃんと言わないとね？」

「っ!?!? …………… え、えーと…………… そ、その…………… わたしも悠夜とお友達になりたい……………」

アリサちゃんは顔をこれでもかというくらい真っ赤にしながらかも素直に答えてくれた。  
語尾が少しずつ小さくなっていったけど、それはご愛敬だ。

「うん！ 宜しくねアリサちゃん！」

そう言いながら俺は手を差し出した。

アリサちゃんは一瞬キョトンとした表情を見せたが俺の意図が直ぐに分かったのか俺の手を握って笑顔で返してくれた。

「へえ」 引っ越して来たばかりなんだ？

悠夜兄さまは？」

「うん。 そうなんだよね。 だから友達もまだ少なくて……」

あれからアリサちゃんと簡単な自己紹介など交わしていたら俺が1つ年上と分かりアリサちゃんは俺の事を兄さまと呼び方を変えてきた。

最初は柄でもないからと呼び捨てで構わないと言っただけどアリサちゃんはある気はないみたいだ……

（正直言っただけじゃないんだけど……）



まあ、可愛い妹が出来たと思って諦めるか……

改めてアリサちゃんを見つめて見ると少し頬を赤らめているがニコニコしている……けど、少しぎこちない気がする……

何だか瞳の奥に悲しみを感じて俺は優しく微笑みながらアリサちゃんの頭を優しく撫でながら「何か悲しいことがあったの？」と尋ねる。

するとビクッと体を震わせて笑顔が崩れ落ち、泣きそうな表情を浮かべながらポツポツと少しずつ話してくれた。時々、詰まりながらだけどアリサちゃんは全てを話した。

「そっか……」

それでアリサちゃんはどうしたいの？」

そう問い掛けると「わかんないわよ……」と呟いた。

「じゃあ、アリサちゃんはパパとママは嫌い？」

そう尋ね返すとアリサちゃんは怒ったような表情を浮かべながら

「そんなことは絶対にないわ!!」

わたしはパパもママも大好きなんだから!!」

と大きな声で答えてくれた。

「だったら簡単だよ？」

傷つけたら謝る。悪いと思ったら反省する。

そして次に笑う。これで皆笑顔になるよ」

「で、でも……わたし……」

「怖い？　もしかしたら嫌われたかもって思ってる……？」

「う、うん……」

そう言つとアリサちゃんは体をふるふると震わせる。

「大丈夫。アリサちゃんのパパもママもアリサちゃんを嫌う事は絶対にないよ……」

「な、なんで……？　どうして分かるの……？」

「だって、アリサちゃんが大好きって自信を持って言えるんだよ？」

ならパパとママも絶対にアリサちゃんを嫌うなんてあり得ないよ？」

そう言つとアリサちゃんハッとした表情を浮かべる……  
だけど、まだ不安そうだね……

なら……

「アリサちゃんまだ不安？」

そう尋ねるとコクリと頷く。

「ならアリサちゃんに勇気をあげる。  
アリサちゃんが笑ってパパとママに会えるように僕がアリサちゃん  
に勇気をあげるよ……」

そう言つと俺は静かに目を閉じ心を静める。

さあ歌おう……

アリサちゃんに勇気を……

笑顔を取り戻す為に……

「あなたに届けたい……わたしの想いを……」

そして俺は歌い始める……

Side OUT

Side  
アリサ

悠夜兄さまが静かに目を閉じると風が一瞬止まりポツリと何かを  
呟き歌い始めた。

（すごい……さっきも歌っていたけど何かちがう……）

何がとはハッキリとは分からないがとても美しく綺麗な歌声で  
悠夜兄さまの心が伝わってくるかのようでまるで応援されているよ  
うな気分でもとても暖かい気持ちが芽生えてくる。

（何だろう、この気持ち？ 凄くあつたかくて何か気持ち良い  
……）

こんな気分は初めてだ…それはとても暖かくて心地よい……  
何だか不安だと思ってた気持ちがどこかに吹き飛んで行く気がする  
……

（すごいよ……悠夜兄さま……天使みたいだよ……）

わたしはその心地よさにだんだんと目が重くなって意識が遠く  
なっていくのを感じながら少しでも目に焼き付けようと悠夜兄さま  
の姿を心に刻み込みながら眠りについた。

「ん……………」  
あれ？　ここは……………」

わたしが目を覚ますと体が浮遊感を感じる。

「あれ？　わたし……………」  
えっ！？」

頭を軽く振って眠気を覚まして改めて自分の状態を確認して  
みて驚く……………」

何故なら……………」

仕事に行った筈のパパの背中に背負われてパパの隣にはママまで――

緒だったのだから……

「おっ！ 起きたかアリサ」

「おはよう。 アリサ…よく眠ってたわよ？」

パパとママが優しく話しかけてくる。

「パパ……ママ……  
その……」

家を飛び出した時の経緯もあり何となく気まずい……

「ふふふ それにしてもアリサはいつの間にあんなにカッコ  
良いボーイフレンドが出来たのかしら？  
ねえ？ パパ？」



「ああ！ それにずいぶんと落ち着いてしっかりとしていて将来が楽しみだ！」

「なっ！？」      ななな／／／ぱっパパもママからかわないでよ／／／／」

私は今までの気まずい気持ちをすっかりと忘れて慌てて反論する。

「べっ、別に悠夜お兄さまとはそんな関係じゃないわ！？」

「あらあら      悠夜お兄さまですって      パパ今日はお祝いね」

「それは良い！  
アリサに恋人が出来た記念日だ  
みんなで食事に行くか！」

「それはナイスよパパ      じゃあ行きましようか？」

「こ、ここ恋人お！？ち、違う！ 違うわよ！？悠夜お兄さまは別に！？ ってパパとママは何でここに居るの！？ 仕事は！？」

恥ずかしいけど、今は疑問に答えてもらうのが先だ今日は仕事で私を探してる時間は無いはず……

「その話しか……」

実はあの後すぐにアリサを追い掛けたんだよ」

「え！？

そうなの！？ 気付かなかった……」

「それはそうだろう…… なんとって私はジャパニーズS・A・S・K・Eでファイナルまで出たんだぞ？」

「パパ」 「冗談はおやめなさいな……」

ママがパパを睨み付けて黙らせる。

「実はね、アリサを公園までは追い付けたんだけど見失ってね……  
どうしようかと思ってたら綺麗な歌声が聞こえて来たから行ってみたらアリサが気持ち良さそうに寝ていたわよ？」

それを聞いて私は顔が真っ赤になった。  
何故なら悠夜お兄さまに私の寝顔を見られてしまったから……

「うう……  
悠夜お兄さまに寝顔を見られちゃた……  
ところで悠夜お兄さまは？」

よく見ると辺りはもう日が暮れてきていて綺麗な夕日が見えて  
いるし、お兄さまの姿も見えない。

「ふふふ

お兄さま……ね

あなたのお兄さまなら帰

ったわよ？

こっちに引越して来たばかりだからまだ電話とかも用意して無  
って言ってたわ」

「そうなんだ……」

私は残念な気持ちを隠せずにため息をつく。

「大丈夫さ！

変わりと言っては何だけどお互いの住所は教えあったから遊びに行  
けるよ！」

パパは笑顔で言うとお私の頭を撫でてくれる。

（そっか……ならまた逢えるわよね？      また歌を聴かせて  
くれるかな？

それに……えへへ／＼／

パパの言葉に私は嬉しくてニヤニヤとしてしまった……

……うつー！

パパとママが何だか微笑ましいものを見てるような視線を送りながら笑ってる……

「べつ別に嬉しいんじゃないんだからね！？」

わ、わたしはただパパとママがい、一緒に嬉しいだけなんだから！  
」

私の言い分にパパとママが微笑みから爆笑に変わってしまった

……

後から思っただけど流石にこの言い訳はないだろうと凹んだのは  
内緒よ……

ともかく悠夜お兄さまのお蔭で何だかとても楽しい気持ちにな  
って清々しい気分になってるよ……

今なら言えるかな……

「パパ……ママ……  
あのね……?」

くアリサ Side Endく

く悠夜 Sideく

………今………僕はとんでも無い危機に立たされている………  
もしかしたら………  
いや、絶対に僕は此处で死ぬかもしれない………

何故なら………

「……………」

公園から帰って来た僕等を待っていたのは無言で僕を睨みながら包丁（のような物）を突き付けてくるリリアだった……………」

「あ、あのさ……………」

り、リリア……………？ 何でそんなものを向けてるのかな……………？」

僕が問いかけるとリリアはしばらく無言で睨み付けていたがやがて……………」

「それは悠夜が良く分かっていると思うよ……………？」

リリアはそう言いながら僕に近づいて来る……………」

「……………？」

僕は慌てて逃げようとしたが体が何故か動かない……

「くっ!？」

スフィール! スフィールからも何とかいつ……」

僕は隣に居た筈のスフィールに助けを求めたがそこにスフィールは居なかった……

(あ、アイツさつさと逃げやがって!？ い、いやそれよりもリリアを何とかしないと!?)

「あ、あのさ……

頼むから落ち着いてくれないかな……?」

お、俺……いや僕はその空気……雰囲気<sup>雰囲気</sup>が苦手なんだよ……」



ふと脳裏に自分が死ぬ瞬間の光景を思い出す……  
あれ……？ 何だか尋麻疹が……

「駄目……」

悠夜は分かってないよ……わたしがどんな気持ちでいたのか……  
……ねえ……それで悠夜から女の臭いがするんだけど……だれ！  
？」

り、リリアが怖い……  
いつもは物静かなリリアが怒鳴るだけで何でこんなに体が震えるんだ……

「あ、あのさ……  
身に覚えがないんだけど……」

「そう……  
でも……おかしいな？  
悠夜の体からは汚らしい女の臭いがするんだけどな？どっかのシン  
デレぶったお嬢様みたいな……ね？」

「っ!!!?!」

もしかしてアリサちゃんのことか!?  
でも特に何かあった訳ではないんだけど……

「もしかしてアリサちゃんかな……」  
今日、公園で知り合って友達になっただけど……」

俺はなるべくリリアに刺激を与えないように簡潔に答えた。

「ふーん……」  
アリサ……ね……なにかしたのかな……?」

あれ?

リリアの雰囲気さがさつきより冷たくなってる……?

「いや……」

何もなかったよ？      ただ、僕の歌を聴いてくれて、仲良くなった  
だけだし……」

「悠夜の歌……！？」

そう……そうなんだ………」

「り、リリア！？」

た、頼むから落ち着いて！？      それ危ないから降ろして……！！」

リリアの纏う空気がまるで音が消えたかのように静かになり、  
リリアが包丁（のような物）を構えて近づいて来る。

「悠夜にはお仕置きが必要だね……？」

ちよっぴり痛いけど我慢してね………」

「リリア……」

洒落にならないから辞めて欲しいんだけどな………」

「大丈夫…… 冗談じゃないよ？」

それに傷ならわたしが直ぐに治してあげるよ？  
だから悠夜が反省するまで……

……おはなししょ？……」

（悠夜 Side End）

（？ Side）

「ふふふ……」

ようやく見付けたわよ！  
彼ならきつと……」

N  
e  
x  
t  
  
S  
T  
O  
R  
Y

## 第7話（後書き）

JNSラジオ

悠「ってな訳でJNS始めるよ」

すずか「どうも初めまして！ JNS代表の月村すずかです  
因みに本編に出てる私とは別人だから間違えないでね？」

悠夜・フェリ

「「ちよつと待て（です）！！」」

悠「何だよ？」

番組の邪魔はいかんよ？」

悠夜「番組ってなんだ！？それにJNSって言われてもさっぱり分  
からないよ！？」

悠「これだからシロートは……」

フェリ「関係ないですよ！！ それより説明して下さい！！」

悠「メンドイな」

JNSはラジオ番組です！以上！」

悠夜「説明になってないよ！！」

すずか「えーとね…… JNSは悠くんがここで小説を書き始める前から色んな所で番組式の小説？をやっててここでもやってみようってなったんだよ？」

フェリ「JNSは何ですかあー？」

悠「よくぞ聞いてくれた！！ 自重ネットすずかつて略である恩人が付けてくれたんだよ」

すずか「わたしは納得してないよ……」

悠「確かとある拍手ですずかの出番が無いので悠さん何とかして下さいって無茶振りがきつかけだったね」

悠夜「あはは……」

フェリ「すずかちゃんはモブキャラですから」

すずか「フェリちゃん……握り潰すよ」

フェリ「！！？す、すいませんでした！！？」

悠「久し振りに見た……  
黒すずか……」

すずか「何か言ったかな悠くん……？」

悠「何でもありません！！」

悠夜「もしかして本編のすずかちゃんもこうなるの……？」



悠「……………」

悠夜「何で無言！？　俺が黒いキャラが苦手なの知ってるのに！！  
？」

すずか「わたしは黒くもないし、ヤンデレでも無いよ」

「……………」

すずか「文句ある？」

「……………」

悠「活動報告でもやってみたんだけど、こっちの方が良いかな？  
て始めて見て様子を見る事にしたよ！

「

悠夜「えっと……………それで何をするの？」

悠「何でも 質問でも対談でも無茶ぶりでも何でもこいやー!」

悠夜「じゃあさ……」

早速、質問があるんだけど……」

すずか「悠夜くんが最初だね! それでどうしたの?」

悠夜「俺……」

死んでないよね……?」

悠「………では時間になりましたのでまた次回!」

すずか「要望やアドバイスも募集してるから宜しくね?」

悠夜「ちよっ!?!?」

悠・すずか

「「解散です!」!」

悠夜「もしかして死んでる!!?」  
ねえ!?!」

## 第8話（前書き）

まさか仕上げるのにここまで掛かるとは……

因みに今回は少し時間を飛ばしているのですが一応は意図しています。

空白の期間はまたそのうちに書きます！

## 第8話

〕?Side〕

「やあ！ 君から連絡とは珍しいね？ 何かあったのかい？」

真つ暗な空間の中に映像が浮かび男の声が響く。

映像に映しだされているのは”Sound Only”のみだ。

「ああ……久し振りだね？ ところで皆は元気かな？」

それに応える声も男……いや女性のようにも聞こえるし少年や少女にも聞こえる中性的な声だ。

「勿論だよ！ 皆、君に逢いたがってる。それに僕もね！」

男の落ち着いた声が少年のように甲高くなる。

「そつか……」

じゃあまた今度会いに行く時には何か作って行くよ！」

「本当かい！？ それは嬉しいね！ それならアップルパイにしてくれないかい？ 君が作るパイは最高だからね！」

「分かったよ！ 必ずお土産に作って行くから。楽しみにしていてね」

それに答える少年？ も年相応のものに戻っている。

「ねえ……そろそろ本題に入らない？ 私もそんなに暇じゃないんだけど……」

暗闇の室内にもう1つの映像が浮かび上がる。

そちらも”SOUND Only”とだけが浮かび上がっておるがその声から落ち着いた女性だと判断出来る。

「おや？ 何時の間に来てたんですか？ 驚いて紅茶を溢してしまっただよ」

「ふざけないでくれるかしら？ 私は貴方みたいに冗談は好きじゃないのよ……」

「またまたあゝ 僕は知ってるよ？ 彼と会う時は何時もと違ってまるで恋する乙女のようにだって」

「！！？ ……………死にたいようね…………？」

その言葉に部屋の空気が重くなる。

通信での会話なのにここまで殺気を送るのは止めて欲しい……少年は溜め息をつくとその喧嘩？を仲裁する。

「はあ………… 2人とも落ち着いてくれるかな？  
それとさ………… 余り彼女をからかわないで欲しいんだけど…………」

話が進まないよ……」

「ハハハ！ ごめんごめん！！ 久し振りに君たちと話すから  
興奮してしまつてね！！」

「毎回これは勘弁して欲しいわ……」

「同感だよ……」

男の何時もの冗談に女性と少年は深く溜め息をつくのだった。

「成る程ね…… やっぱり上層部全体が似たようなものか…… 判  
つてはいたし期待もしてなかったけど応えるね……」



「期待するだけ無駄よ……私達だって、彼が居なかったら今頃は消されてたわよ？」

「

「違うない……最も簡単にやられるつもりはないけどね。でもろくな最後にならないだろうけどね……」

通信越しにだが静かな怒りと苦悩を滲ませながら2人は語る。

「でも……そんなろくでもない世界だけど僕等は君と出会えた……そして何よりも僕をただの人として扱ってくれた！」

男の声に力がこもり熱を帯はじめる。  
それに同調するかのように女性の声にも力がこもり始める。

「本当ね……貴方と出会って居なければ私ほとんどない間違いを起こしていたわ……本当に感謝するわ……」

女性も感慨無量と言った感じで少年に礼を言う。

「あんまり褒めないでよ……僕達が動けたのも本当に偶然なんだよ？」

もう少し早く対処出来ていたら良かったんだけどね」

それに対して少年は少し後悔を滲ませつつ応える。

「そんな事、言わないでくれよ。僕と娘達を助けてくれたのは事実なんだ。」

それとも君は全てを救うヒーローにでもなる気かい？」

青年の口調に少し嫌悪感が見え始める。

「まさか……  
そんな事思っ訳ないじゃないか！ 君だって僕の気持ちは知ってる  
だろう？」

少年の口調に力がこもる。

「ははは！ ごめんよ？ 少し君の困った顔が見たくてね！」

「はあ…… 貴方、悪趣味よ？」

「すまない。君の困った顔はとても興味深いからね。 もう言  
わないよ？」

「……………はあ。  
じゃあ話しを続けるよ？」

そう言つて3人は話し合いを再開するのだつた。

「じゃあまた連絡するよ」

「ええ。待つてゐるわよ？それと近々、あの娘達がそっちに行くから宜しくね？」

「そういえばそうだったね……分かったよ。  
2人に楽しみにしてゐるって言つていてね？」

女性の言葉に少年は嬉しそうに微笑みながら答える。

「判つたわ。喜ぶわよ？あの娘達は貴方にぞっこんだしね？」

女性の口調が柔くなり嬉しそうでいて少しからかうような物に変わる。

「おやおや……何の話しだい？ 私にも教えてくれよ」

すると今まで黙って聞いていた男性が話しに入ってくる。

「私の娘が彼を手伝いに行くのよ。それに彼に任せているデバイスのチェックもしたいしね？」

「おやおや。デバイスの報告なら通信で問題ないじゃないかい？」

「貴方……分かってる癖に趣味が悪いわよ？それに母親なら子供の幸せが第一なんだから」

青年のからかう物言いに女性は呆れた口調で反論する。

「何。貴女に先を越されたから少しからかっただけさ。それにそれなら僕も黙ってはいられないね！僕も近いうちに僕の娘をそっちに送るよ！僕もデバイスのデータが欲しいしね」

青年も女性に対抗するように言ってくる。

「はあ……………」  
分かったよ。纏めて面倒みるよ……………  
それから、僕の家族も宜しくね？」

それに対して少年は疲れたように返事を返す。  
女性と青年は『勿論！』と綺麗に返事をする。

「じゃあそろそろ通信を切るよ？ 休み時間も終わるからね。  
じゃあまたね？……………ジェイルにプレシアさん」

そう言っと。暗闇に包まれた室内に照明が付き今まで暗闇に隠れていた少年の顔がはつきりと見えるようになる。  
照明の光りに照らされ美しく光る銀髪に中性的な顔。

月神悠夜その人だった。

}?Side End{

「ふう……あの2人には適わないな……」

ジェイルとプレシアさんの定時連絡を終えてひとまずホッと息をつく。

「しかし、まあ……  
管理局が人手不足で能力の高い人材を確保したがってるのは知って  
はいたけど……」

そう呟くと自分にあてがわれた部屋をグルリと見回す。

落ち着いた色調で統一され部屋の広さも自分のデスクに補佐官のデスクが2つ並び最新の機材も揃っているのにまだ余裕がある。

「こつちには労働基準法とか関係ないのかな？」

少なくともこちらの地球にはあるみたいけど……」

正直いってこの環境は異常だろう……

自分としては現在進行中でお子様であるから動き易いのは助かるのだが……

自分は元々、二度目の人生という有り得ない状況で幸い自分が元々持っている価値観や倫理観がしっかりと構築……いや、学んで来た。しかし、管理局で働いている自分よりも少し年上な少年、少女達は必要最低限の教育環境しか与えられておらず魔法などの訓練や管理局が定めた価値観や法を教え込んでいる。



（世の中にはちゃんと学べない人もいるし……  
完全に間違っているとは言わないけどこの環境だと偏った価値観しか  
持てないんじゃないかな……）

管理局で教えられている事は端から見ると非常に合理的かつ機能的  
で公平に見えるだろう。

だけど、非常に良く出来た人間育成プログラムなんだがそこ  
には感情が見えてこない。

これは自分の考え方だが人間とは失敗を重ねて成長する生物だ。

人間の感情や倫理、はたまた常識などは直接、人とふれあい、失  
敗や成功を重ねて自分なりに構築していき、特に小さい子供は学校  
へ行き学び、友達と遊ぶ事が重要だと思う。

確かに、ここにも教育機関はある……

だが自分には皆、同じ表情を浮かべているような気がする。

それが間違っているとか正しいとか思わないけど何処淋しさを感じる。

ふと、自分が管理局に行く事を決めた日を思い出す。

「ええー！？ 管理局に入局するの！？」

自分が管理局に行くと言った事の第一声がスフィールの不満そうなるコメントだった。

「う、うん。 そのつもりだけど不味いかな……？」

それに対して悠夜は何処か気まずそうな表情を浮かべながら答える。

「不満も不満！！大不満だよ！？」

それに対してスフィールは完全にご機嫌斜めのような……

「……………ねえ、悠夜？」

あれだけ調べて管理局が大変な組織だって判ってるのに何で？」

リリアが不思議そうな表情を浮かべながら尋ねる。

「うん。 確かに僕もそう思ったよ」

「……………」

「だったら何で……………」

「そうだね……………」

確かに調べてみたら管理局については色々と後ろめたい物があった  
それで悲しんでいる人がいるのは事実だね。　　だけど、それが全  
てじゃないし、僕達も全てを知った訳じゃないよ？」

「……………」

悠夜の言葉に黙るリリア

「なら主はどう思い、行動していくのですか？」

フィルスが問い掛ける。

「そうだね……」

まず言える事は僕は僕達は管理局の全てを知った訳ではない。それで、管理局をどうするっていうのもおかしいよね？  
なら直接、自分で見て感じて自分が正しいと思うやり方を見付けた  
い。

何も知らないで批判するのも弾圧するのも結局、エゴに過ぎない……  
それは今、必死に頑張ってる人に対しても失礼だし、だから僕は  
間接的にじゃなくて自分で見てみたい」

「そうですか……」

しかし、それだと主も手を汚す事もあるかもしれませんよ？」

「僕は聖人じゃないよ？手を汚す事を恐れていたなら何もできないよ……」

それに、後ろで偉そうにしてるのも性に合わないよ」

「判りました。そこまで言うのであれば何も言いません。皆  
も宜しいですね？」

フィルスが皆に尋ねるとシュレリアを除いた2人が頷く。

「シュレリア？ まだ何か納得いきませんか？」

フィルスの問い掛けに応えず俯いて何処か暗い表情を浮かべるシュレリア……

「シュレリア？」

悠夜が心配そうにシュレリアに呼び掛けるとシュレリアはゆっくり顔を上げて話し出す。

「ねえ……悠夜？  
それって凄く大変じゃないかな？ どうして管理局の人まで考えるの？」

そう問い掛けられると悠夜は静かに目を閉じ祈るような口調で語り始める。

「Please help us to go away from the crime, and to follow you when loving and serving...  
In the glory and honor, even for a long time is yours...」（罪から遠ざかり……愛と奉仕において、貴方に従うことが出来るように、私たちをお助け下さい。栄光と誉れは世之に至るまで貴方のものです…  
…）」

「悠夜……それは……？」

語り終えた悠夜にシュレリアが啞然とした表情を浮かべる。  
因みに、スフィールは最初の一言で「聞こえなあゝい！！」といったしゃがみ込んでいる。

「実はね……死ぬ前にはアイドルとかなんとか言われていたんだけど、元々は紛争地域を仲間と廻って音楽を聴かせて歩いてたんだ……そこで戦っていた少年兵達が毎日祈ってた言葉だよ……」

悠夜は静かに語る。

「だから少しは戦争の仕組みも理解は出来るんだよ……  
人の欲望、宗教、資源……色々な問題を抱えてる。

そしてそれは、弱い人間から全てを奪っていく。

例えば僕が管理局を否定して敵対組織を立ち上げるとする……

そしたら、管理局といずれ戦争になる。

結局、それでまた傷付いて新たに僕等を憎む人が現れる。

……だから、僕は知りたいんだ」

シュレリアはその言葉を聞くと少しは哀しそうな表情を浮かべて……

「そうですか……

なら何も言いません。私は悠夜に付いていきます。……

……本当にそういう所は変わりませんね……」



シュレリアの最後の眩きは静かに響いた。

「え……？ シュレリア……それって……」

と聞き返そうとした悠夜だがそこにスフィールの叫びが掻き消した。

「ゆっ……やあ……！？さっきの言葉はなに！？  
悠夜がエジプト人になっちゃったよぉ」

「ちょっと待て！？  
何で僕がエジプト人になる！？」

「じゃあ宇宙人！？ 私は日本人だから異世界の言葉は判らないよー！？」

「待て！？ それはそれで可笑しいよ！！ スフィールってどこから見ても外国人だよ！！」

「そんなことないよ！！忍さんはやてちゃんも『スフィールは日本人だねえ（やねえ）……色んな意味で……』って言って誉めてくれたんだよ！？」

「……………それ誉めてない…………… 誉めてないよ…………… スフィール……………」

「マスター！？ 私が食器を洗ってる間にお話するなんて酷いですよー！？」

「……………あつ……………  
忘れた訳じゃないよフェリ？ ただ……………思い出せなかったただけなんだよ？」

悠夜の苦しい言い訳が虚しく響く……

「仕方ない……  
フェリは空気……」

「空気なら仕方ないよ」

「ある意味、おいしいね！」

「ふっ……てつきり私が空気キャラかと思いましたけどんだ伏兵です  
ね」

「むきー！？ 私は空気でも背景でも仲間外れのさびしんぼでもありません！！  
マスターからも言ったださい！！？」

因みに上からリリア、スフィール、シュレリア、フィルスである。

「あはは……  
ノーコメントで……」

「酷い!!  
マスターのばかぁ!?!」

月神邸にフェリの叫びが響き渡るのだった……

「そういえばシュレリアはあの時なんて言ってたんだろっ……」

あの時はフェリが暴走したお陰ですっかりと忘れていた事を思い出しました物思いにふける。

「すみません！ 悠夜さん。 お忙しいところ失礼します！」

突然の通信に悠夜は思考を止めて返事をする。

「いや。 大丈夫だよ。 それよりも 何か事件かな？ クロノ君？」

「はい。 ミッド付近で高魔力反応が測定され調査に出ていた局員の反応も消えました」

悠夜の質問に答えるクロノ

「わかったよ。 直ぐに行くフェリとシュレリアは？」

「はい。 もうすでに準備にかかって貰っています。 ……………  
…あのもしかして余計な事しましたか？」

「いや………完璧だよ。  
流石はクロノ君だね？」

「いっいえ！ 自分はまだまだ……」

「相変わらずマジメだね……クロノ君は……  
さてと、じゃあお仕事だ」

「はい。      ではこちらも準備してますね」

自分より年上の部下からの通信は消え悠夜は自分のデスクからあ  
るものを取り出す。

「さてと……お前たちの初起動だ。      よろしくね？」

そう話しかける悠夜の手の中には赤い宝石と黄色い三角形の形を  
した宝石が悠夜に返事をするかのように静かに光りを放つのだった。

「さあ……行こう。」

レイジング・ハートにバルディッシュ！」

N  
E  
X  
T



## 第8話（後書き）

〽JNSラジオ〽

悠夜・フェリ

「「……………」」

悠「みんな久し振りだね〽僕は元気じゃないよ！」

すずか「あのさ…………悠くんまさかそんな状態で再開するって馬鹿なのかな？」

悠夜「そつだよ！？　なに無茶してんの！！」

悠「あ…………今回の前は前から少しずつ書いてたのを妹に代筆してもらって仕上げたからノープロブレム」

フェリ「よくそんな気が起こりましたね？　ぶっちゃけ意識不明  
ってただけですかー？」

悠「僕もびっくりさ　（　。　。　ノ　ノ　）」

すずか「とどめが必要かな……？」

悠「めんちゃいm（——）m  
「m

悠夜「あはは……  
じゃあ始めようか？」

フェリ「それが良いですよー  
」

悠夜「先ずは今回の話しただけ……ぶっちゃけいきなり展開変わ  
りすぎじゃない？」

フェリ「そうですねー

わたしなんか空気でしたしー（黒笑）」

悠「いやー 何かあのままだとグダグダと続きそうだったからね」

すずか「それにしたってやり方があるでしょ？  
それに……なのはちゃん……良いの？」

悠「（　・　）」

悠夜「忘れたな……」

フェリ「です……」

すずか「知らないよ……」

悠「あ、あはは……そんな訳ないだろ！？ 主役だよ！？ 忘れな  
いよ……!?!」

悠夜・フェリ・すずか  
「「「じー（P「q。（「「「

悠「……………因みに空白の期間はそのうち劇場番みたいな感じで  
出せたら良いなあ……………」

悠夜「誤魔化した!?!  
それと予定じゃなくて願望?!」

悠「さて！ 質問に行こうか！ フェリよろしくー」

フェリ「仕方がないのですねー      では……………教えて!?! フェリ  
先生ー」

すずか「タイトルあったんだ……」

悠夜「知らなかったです……」

フェリ「えー このコーナーでは読者さんの質問をわたしがきつかりと答えてフェリちゃんサイコー ってわたしの好感度を上げる為のコーナーだよ！」

悠夜「おもいつきり私情だよ!？」

？「……………空気のくせに（ボソッ）」

フェリ「何か言いましたか!？ ってあれ？ 誰も居ませんねー？」

悠「えーと最初の質問がカガヤ先生のノア様ですねー」

フェリ「こらあゝ!?!  
勝手に読まないで下さい!?!」

すずか「そういえば何でノア……様なの?」

悠「僕がノア様親衛隊隊長だから!?!」(´・`・´)(´・`・´)

フェリ「わたしのおねーちゃんです」

すずか「そうなんだ……」

フェリ「じゃあ質問いきますよー」悠さんはギャグキャラだから何をしても死にませんよね (黒笑)『……これは……』

悠「……」

フェリ「はい! 死にません」

悠「ちょい待ち!？」

僕がいつギャグキャラになった!？」

悠夜・フェリ・すずか

「「「最初から!！」」

悠「な、何だつてー!？」 ( ; )  
「

すずか「第一……女性に刺されて死にかけるとギャグキャラでしょう?」

フェリ「その他にも色々やりましたよねー?」

悠「…………… (、、) 「

フェリ「はい！　というわけで悠はギャグキャラなので死にません  
」

すずか「じゃあ次だね？

鮮血の刻印先生から『ギャグ要因はフェリ、シュレリア、スフィールでは？』これは間違いないね！」

フェリ「そんな事はないですよ！！　あの3人ならともかくわたしは……（ガシッ）へ？」

スフィール・リリア・シュレリア

「「「……………」」」

フェリ「……………」えへ」

スフィール・リリア・シュレリア

「「「……………」#」」」



フェリ「いやあ~~~~~~~~!!?。。へ(。<>)」

スフィール・リリア・シュレリア

「「「待て〜!? 〳ゝ(＊、・)ノ」」」

悠夜「以上、お笑いカルテットでした!」

すずか「悠夜くんってマイペースだね……」

悠「そうだね」

では最後に鮮血の刻印先生のエクシーガさんからだね」『悠夜の何処が好きなんですか。出来れば全部以外で』これか〜きちんとした描写はまだ出てないよね〜経緯はともかく理由を語って貰おう!ネタバレしない程度に!じゃあフェリから!」

フェリ「キュ〜、(+ +)ノ」

すずか「は無理だからスフィールからだね」

スフィール「うーん……」

そっだねー悠夜がこの前にアイスを奢ってくれたから」

悠・すずか

「「やす!?!」」

スフィール「それからねーその後にたい焼き買って貰ったしーそれからそれから」

すずか「この後、延々と語ってたけどカットね?次はリリアちゃん」

リリア「……私は悠夜の為に存在して悠夜は私の為に存在する」

悠・すずか

「「……」」

すずか「何とか……リリアちゃんらしいね……」

悠「すずかちゃんも人の事は言えないよ（ボソッ）」

すずか「また意識を飛ばしたいみたいだね……」

悠「最後はシュレリアです！……」

シュレリア「あの……ほっというて良いんですか？」

悠「いいから早く答えて！？」

シュレリア「は、はぁ……私はですね……贖罪かな？」

すずか「シュレリアちゃん……？」

シュレリア「はっ！ い、いえ！ ゲームです！ ドラ エでひたすら城の周りで経験値を稼ぐ悠夜に掘れました！！」

すずか「何処を掘るのよ……」

悠夜「所でもう終わった？ ヘッドホン着けてて何も聞こえないんだけど？」

悠「あ、はいはい！ 終わったよ！ これで終わりだね？」

すずか「フェリちゃんがまだ（チラッ）」

フェリ「きゅっ／＼（＋＋）／」

悠「という訳で教えて！？フェリ先生は今回は終了します」

悠夜「質問とかあったら何でも送って下さい！」

すずか「要望もあつたらどしどし送ってね？」

悠「てなわけで現在は病院のベッドで妹に代筆をさせてる悠でした  
！」

悠・悠夜・すずか

「」「解散！」「」「」

すずか「ねえ……悠くん？お話しの続きしよ……？」

？白い魔王「奇遇なの……私もお話しにきたんだ……」

悠「ふ……悠は逃げ出した!!」

すずか「しかし周りこまれた」

？白い魔王「なの」

悠「ぬわあああああああ!!!!!!??」

## 第9話（前書き）

今回はいよいよ彼女が出ますよ！

無理矢理ですが……

決して脅された訳じゃないぞ（泣）

## 第9話

「クロノ君。状況は？」

「はい。本日未明にミッド付近で高い魔力反応が検束され調査チームを派遣したのですが反応が全てロストされました」

ヘリ内部

悠夜は自分の執務補佐官であるクロノ・ハラオンと任務について話しあっている。

「調査チームの構成は？」

「Aランク魔道師が3人に現場指揮として一尉と執務官二名の



5人構成です」

「調査には充分だね。  
他に判った事は？」

「反応がロストするさいに戦闘があつたみたいなのですが戦闘データや通信履歴も全て消去されてしまいこれ以上は………」

「そっか……  
なら確実に戦闘になりそうだね………」

「それと、ただ………」

クロノの口調に困惑が見えはじめる。

「ただ？」

「えっと……一部で検出された魔力反応なんですけどAAAランクを越えていたそうです……」

「エースか……」

「ですがいくらAAAとはいえAランク以上が5人の局員がやられるのでしょうか……」

「クロノ君……事態は常に最悪を想定すること。  
それと魔力ランクだけで判断するのは危険だよ？」

「そうでした……  
すみません悠夜さん……」

「前から言ってるけど敬語はよして欲しいな……  
僕は年下だし……」

「そんなのは関係ありません!! 悠夜さんは僕にとって尊敬  
する先輩ですし憧れです!」

クロノの口調が熱血なものに変わる……

「相変わらずだね……  
クロノ君はさ……」

ふとクロノとの出会いを思い出して苦笑いを浮かべる悠夜。

クロノと出会ったの悠夜が管理局に入局してから間もなくで最初  
からこんな感じだった。

悠夜の方が僅かに早く入局したのだが悠夜は同僚として見ているのに対してクロノは史上最年少での執務官として入局した悠夜を尊敬し、少し……いやかなりの悠夜の熱狂的なファンでもあり、悠夜の補佐官に入局したばかりのクロノが必死に勉強して配属されたのも有名である。

「あははは　クロノはマスターのファンみたいなものですからねーそれは無理ってやつですよ」

「それにクロノ君は頑固だから……諦めた方が良くと思いますよ？悠夜くん」

悠夜が内心でため息をついていると両隣に座って話を聞いていたフェリとシュレリアが話しに入ってくる。

改めてクロノに視線を向けると拳をぐつと握りしめ目をキラキラさせている年上の少年の姿があった。

管理局に入ってからまだ一年なのだが恐ろしい事にクロノみたいなのが増えているようで、既にファンクラブなるものも結成されたと報告を受けたのも記憶に新しい……

「……………ふう。」

フォーメーションの確認にいくよ?」

悠夜は諦めたのか疲れた表情をしながらフォーメーションの確認に入る。

「まず建物に突入するのは僕とシュレリアで行く。フェリは後方で決界の展開、その後は全体の管制を統括。クロノ君は他の局

員を指揮、建物を取り囲むように展開、半径3キロ単位で警戒して対応して貰う。それから建物の瓦解、要救助者が出る可能性も考えてレスキューチーム要請をしておいて」

「はい。了解です！」

あの……フェリは一緒じゃなくて大丈夫ですか？  
管理局で既存するデバイスでは悠夜さんには……」

クロノが言いずらそうにフェリを見る。

「ああ……新型のデバイスが完成したから今回からはそれで行く。

それに今回は建物の広さを考えるとフェリとのユニゾンは最善でないと思う。

ぶつつけになるけど今回はこの子達に頑張って貰うよ」

『Nice to meet you, chrono（初めましてクロノさん）』

『I am glad to meet you.（お会いできて光栄です）』

レイジングハートとバルディッシュがそれぞれクロノに挨拶をする。

「インテリジェントデバイス……！ しかも2機ですか！？」

クロノが驚きの顔で悠夜を見る。

「うん。テストもかねてね？ レイジング・ハートが砲撃、防御、バルディッシュが近接と高速機動がメインになるのかな？  
今までは概存のストレージとフェリでなんとかしていたけどフェリもスタンドアロンで動けるからね」

「あの……」

そんないきなりで大丈夫ですか？ 悠夜さんの実力なら問題ないとは思うのですが……」

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫だよ。この2機は僕が知る中では最高の人達が造り上げたものだからね」

悠夜がそう言うときクロノは心配そうだが頷きレイジングハートとバルディッシュに

「君たち、悠夜さんを宜しく頼む」

クロノの言葉にレイジングハートとバルディッシュは



『All Right』

『Yes Sir』

とそれぞれ返すのだった。

「月神執務官。現場に着きました」

「判った。……………それじゃあ準備は良いかな？」

悠夜の問いかけにそれぞれが首を縦に振る。

「よし。じゃあみんな行こうか。クロノ君、外は任せたよ？」

「はい！ 悠夜さんもお気を付けて！」

クロノの激励を背に悠夜とシュレリアはへりから飛び降りる。

「さあ……行こうか！  
バルディッシュ！」

『Get Set』

バルディッシュがバリアジャケットを展開して執務官の制服姿から漆黒のバリアジャケット姿に変わる。

「バルディッシュ建物内部はどうなってる？」

『It is not felt perhaps, it seems to be intercepted.（何も感じられません。恐らく外部とは完全に遮断されているようです）』

「レイジングハート？」

『I also think similarly.（私も同じです）』

「そう……っ!？」

フェリ、周囲を索敵！ それと結界急いで！  
シュレリア戦闘準備！ 魔力弾が来る！」

（判りました!）

フェリの言葉と共に周囲に結界が展開される。

「バルディッシュ！」

『Protection』

悠夜がバルディッシュを前に向けると杖の先からシールドが展開され向かって来ていた魔力弾を消失させる。

「悠夜！？」

「大丈夫！ それよりも陣形は乱さないで！」

シュレリアが慌てて近寄ろうとするが悠夜が落ち着いた声で押し留める。

「さてと……急に攻撃される覚えはないんだけどな」

悠夜が建物の方に目を向けるとそこには2人の男がこちらに向かってくるところだった。

「君たちは何者かな？  
目的を教えてもらえるとこっちは助かるんだけど？」

悠夜の問いに男達は無言でデバイスを構えて睨み付けて応えた。

「管理局に答えることなんかない……」

「教えてくれないと話し合いも出来ないんだけど……」

「そんなの嘘っぱちだ！？　管理局が話し合いなんかするもんか！　僕達の村を焼き払い村の宝を奪い、さっきだって話しも聞かずに襲って来たくせに！！」

もう1人の男……いや少年が悠夜を睨み付けながら叫ぶ。

「それは本当ですか？」

悠夜が男の方に目を向けると男は黙って頷く。

「村の名前を覚えてくれるかな？」

「カルサシス……」

「クロノ君。聞こえた？」

《データベースを照合中……ありました！ カルサシス……村  
民200名程からなる農村で先月にロストログアを回収しています》

「その時に指揮を取ったのは？」

《えっと……キング執務官です》

（なるほどね……）

悠夜はクロノの答えに納得した。

確か今日の調査チームにもキング執務官が加わっていた。

彼は調査態度に問題があり度々、問題を起こしていたが何故かそのたびに不問扱いになっていた。

（彼が上層部と繋がっていたのは明白だったけど……遅かったか……）

悠夜はそのことに少し頭痛がしたが、頭を軽く振って男達に向き直った。

「貴方達の事情は少し理解できました。それで貴方達は彼等



をどうしましたか？」

「殺った。いきなり襲われたんで抵抗させてもらった。当然だろ？  
こちらにも命が掛かっているんだ」

「確かに貴方達の言い分が正しい事は恐らく間違っていないし、  
調べれば判る事でしょう……」

「ほお……」

「管理局員は話を聞かないと思っていたがお前は少し違うようだな  
？」

「承知の上ですから……それで貴方達はどうするつもりですか  
？」

「管理局を潰す。家族を奪われたんだ復讐するのは人として当然だろう?。」

「……………踏み止めませんか?」

「無理だ。俺達はもう復讐する事しか生きる道がない」

そう言うと男達はデバイスを悠夜達に向けた。

「これが僕等の罪か……バルディッシュ」

『Scythe from』

悠夜は哀しそうに呟くとバルディッシュを鎌状に変化させる。

「だけど……」

悠夜の目に静かな力が宿り始める。

「ここで歩みを止める事は出来ない……  
貴方達を管理局員の暴行の罪で逮捕します」  
だから……

悠夜はそう言つと男達に向かつていった。

〽悠夜SIDE End〽

〽海鳴市 翠屋〽

「あつ！　なのは、なのは！！　悠夜君がテレビに出てるわよ  
」

「本当！？　お姉ちゃん！！」

なのはと呼ばれた茶色い髪をした少女は姉の言葉に慌ててリビ

ングのテレビの前に寄ってくる。

「わ、わわ!？」

だがよっぽど慌てていたのか途中でつまずいてしまつ。

「おっと! 危ないな。 気を付けろよなのは」

そんな彼女を慌てて支えたのが黒髪の高校生位の少年だ。

「えへへ……………ごめんなさいお兄ちゃん／＼」

そんな兄のたしなめになのはは恥ずかしそうに謝る。

「それはいいから。」

早くしないとテレビが終わっちゃうぞ?。」

兄の言葉になのは、はっと思い出すと再び慌てて

「あゝ!?! 急がないと終わっちゃうの!?!」

と叫びリビングに向かって行った。

そんな妹の様子を見て苦笑いを浮かべる黒髪の少年……………いや高町恭也。

海鳴市翠屋の高町士郎、桃子夫妻の長兄であり古武術御神刀流小太刀二刀術の師範代である。

「おや？ 恭也は見に行かないのかい？ 恭也も彼の歌は好きだって言っただけだったかい？」

「父さん」

恭也に話しかけるのは高町士郎。  
喫茶店、翠屋のマスターでもあり御神流の剣士でもある。

「うん。いま行くよ。」

俺も彼の歌は好きだからね」

「恭也が音楽に興味を持つのも珍しいわね」  
忍ちゃんの影響かしら？」

と恭也の後ろから話しかけるのは高町家をまとめる最強と噂される高町桃子。

「か、母さん違うつて！だって彼は海鳴から出たスターだし、彼の歌は何だか心に響くんだ！」

「あらあら素直じゃないわね　士郎さん恭也ったら何でこうなんでしょう？」

「恭也だつて年頃の男の子だから仕方ないさ。  
だがな恭也？　男のツンデレほど見苦しいものはないぞ？」

と史朗と桃子が恭也をからかうと案の定、顔を真っ赤にしてリビングへと走って行った。

「あら　怒っちゃったわよ？　士郎さん？」



「男はああやって成長するものだよ？　さて、私達も海鳴が生んだスターの歌を見に行こうじゃないか？」

「そうね　土郎さん」

楽しそうにリビングに向かう高町夫妻であった。

「あ！　お父さんもお母さんも遅いよ、もう始まっちゃうの！」

「ごめんよなのは。」

お母さんが僕を離してくれなくてね」

「あらあら土郎さんたら」

「にはは……」

相変わらずお父さんとお母さんは仲がいいの……」

「ていつかちょっとづつたいね……」

「美由希……諦める……」

高町夫妻のラブラブな空間に呆れる高町3兄妹……

「あっ！？ お父さん達もお兄ちゃん達も静かにして！ 始まるの！-！-」

「なのも随分と熱狂的だよな……」

「そうだね……恭ちゃん……」

なのはの剣幕に若干引いた恭也と美由紀だった。

「あー やっぱり悠夜くんの歌は最高だったの」

無事に番組も終わり満足そうな表情のなのは。

「それにしてもなのは熱狂ぶりは凄いわね」

「ふむ……なのは毎日遊びに行ってる海鳴公園で歌っていたのがきっかけでデビューしたらしいし、特別なんだろう」

そう話す士郎と桃子の話を聞いて美由紀はなのはに尋ねる。

「へえー それだったらなのはも悠夜君の歌声を生で聴いたりしたの？」

「うう………それが無いの……毎日、遊んでたのに………」

美由紀の発言にずーんと落ち込むのは。

「ま、まあ。海鳴公園で唄っていたんだ！ 自宅もそんなに離れていないだろうし、いつか遇えるさ！」

落ち込んだのはを見て恭也が慌ててフォローする。

「あら恭也！ それはナイスな提案だわ！！ そうしたら内のケーキを食べて欲しいわね」

「それは素晴らしいね！ なら最高のおもてなしをしなければ……」

「……………父さん。母さんも……………」

恭也は両親の気楽さを見て呆れるが……

「家に来たらサイン貰おう　それに写真も……………ヤバイ……！  
皆に自慢出来るな」

「ゆ、ゆゆ悠夜くんが家に……！　はにゃ」

「……………俺の方が間違ってるのか？」

恭也の嘆きが高町家に広がるのだった。

＼海鳴市 愉快的家族SIDE End＼

＼へり内部＼

「あの……悠夜さん。 お疲れ様でした……」

クロノはへりに帰ってから無言で考え込む悠夜に話しかける。

「ん？ …………… ああ、お疲れクロノくん」

それに対し悠夜の返事は酷く消耗した様子である。

「……………あ、あの悠夜さん。先程の件、まだ気にしてま  
すか…………？」

クロノの言う先程の件とはついさっき悠夜が捕まえた犯罪者の  
事だ。

「さてね…………でもこればかりは慣れたくは無いね…………」

「あの…………悠夜さん。  
正義って何でしょう？」



クロノの問いに悠夜は静かに目を閉じて、黙り込む。

「……………戦争する側の都合の良いものだよ」

しばらく悠夜は目を閉じて考え込んでいた悠夜が目を開き語ったことはクロノには理解出来なかった。

「都合の良いもの……………ですか？」

「そう。正義なんてものは存在しない。あるとしてもそれは自分の考え方の方針に過ぎない」

「存在しない……」

「そもそも管理局法自体が管理局が定めたものだし僕等はそんなに偉いのかな……」

「悠夜さん……」

「まあ、法自体はそんなに間違ってるとは思わないけど、僕達（管理局側）の間違いを罰する記述とかが無いのが疑問だね」

「……………」

悠夜の独白に黙り込むクロノ。

「結局、管理局員も同じ人間であって全てが正しい訳じゃない。大切なのは自分で考える事を止めて行動しないこと。僕達の正義だって必ずしも正しい訳じゃないからね」

「難しいですね……」

「クロノくん。これは僕にも言えるけど執務官はそういった矛盾に直面する機会が多いと思うよ？」

次元犯罪を追っていると悲惨な事件を担当する機会が多いだろうしね」

「考えただけで吐き気がしてきますね……」

悠夜さんは本当に色々詳しいですね？

自分が年上って忘れちゃいますよ？」

クロノが珍しくからかう口調で悠夜に話しかける。

「まあ……色々あったからね。僕達は魔法と法の番人と名乗ってる以上、全てに公平であり誰よりも自分に厳しくなくちゃね？」

「悠夜さん……！」

そうですね！ 流星は悠夜さんだ！ やっぱり憧れます……！」

クロノの雰囲気が一転してまたキラキラし始める。

「……………所でクロノくん？」

「ハイ……！何でしょうか悠夜さん！」

尻尾があつたら間違いなくはち切れんばかりに振っているだろ  
う……

「僕ってそんなに老けてるかな？」

「え……………」

時間が止まる。

「い、いえそんなつもりで僕は……………」

「クロノくん？」

「は、はい」

「帰ったら模擬戦しよ。  
とい成長がみたいからね」

久しぶりにクロノくんの悲鳴……………も

「ゆ、ゆゆ悠夜さん？  
いま何か物騒な単語が…………」

「何か言ったかなあー？クロノくん」

「……………いえ、何も」

《クロノが悪いですよー？マスターを怒らせるから》

《まあ、自業自得だからね》

フェリとシュレリアからの念話にガツクリと肩を落とす執務官補佐の少年がそこにいたのだった。

〔 Next Story 〕

おまけ？

「最近、悠夜くん家に遊びに来てくれへんなー  
まあ、仕事が忙しいからしゃあないか……」

はやてはそう呟くと1年前に出会った少年の事を思い出す。

「やっぱりあれだけのイケメンさんで歌も上手いと人気も凄いやろうな……  
優しいし……」

はやては悠夜から送られて来たCDに目を移しながらぼやく。

「でもかまへん!!  
悠夜くんはわたしの大切な人や! 支えてあげへんと! ……  
……そうなるとわたしって悠夜くんの奥さんやん!  
ぐ、ぐへへ／＼／」



はやての表情が余り表現したくない顔になる……

「ファンの女の子さまーみろや　　悠夜くんは既にわたしの物な  
んやからな」

そう笑顔で話すはやては……立派な肉食系だった（笑）

「……………っ！！？」

「どうしましたかー  
マスター？」

「い、いや……何か今すぐにはやてに会いに行かないとヤバイ事になりそうな……」

「どうしてそこではやてちゃんが出てくるのですか？」

「分かんない……」

「？」

おまけ？    E n d

## 第9話（後書き）

「JNSラジオ」

悠「ども」JNS始めるよ」

すずか「今回は随分と速かったね……まだ動けないのに……」

悠「妹が……ね……」

悠夜「何か暗い……」

悠「き、気にすんな（泣）  
早速、始めるよ！」

悠夜「そういえば今回、初めて戦闘らしきものがあつたけど……途中で終了したね？」

悠「あれはどこかの魔王のせいであつて僕のせいじゃないぞ……！」

すずか「なのはちゃんにまた怒られるよ？」

悠「あはは（o‘‘o）

そういえば悠夜ってテレビに出てるんだねー」

悠夜「あんたが書いたんだろうが！？ 急展開でびっくりしたよ！  
」

悠「まあ、これも近々判ってくるからさあ」

フェリ「ネタ帳は真っ白ですよ？」

悠「そ、それとデバイスは英語にしてみたけど僕は余り英語が得意じゃないから間違った表現や誤字が出ると思ってから優しく教えてくれると助かるんだな」

悠夜「だったら日本語にすれば良いのに……」

すずか「これだから厨二は……」

悠「……………（、、）」

悠夜「さてバカの相手はそこそこにフェリ宜しく!」

フェリ「分かりました! 教えて!?! フェリ先生」 このコーナーは本編の疑問やどんな質問もフェリが答えて解決!!! フェリちゃん

最高のコーナーです」

すずか「何か増えてる……」

悠夜「出番が微妙だから必死に……」

フェリ「そこお！！黙るのです！？ では早速、カガヤ様から『今の時間列ってどのくらい？』………これは」

悠「答えましょう！ 悠夜が海鳴に来てから約1年後くらいです！！」

悠夜「なあ作者？

それって普通、判るような記述が入らないか？」

悠「え、えーとその、そうだ！ あれだよ！！あれのせいなんだよ！！？」

悠夜・フェリ・すずか

「「「？」」」」

悠「ノストラダムスの陰謀だったんだよ！！！」（「

「「「……………」」」

悠夜「一度死んだ方がよいよ…………てか死ね」

悠「ああ！！…にこやかに酷い！！」

すずか「つまり忘れてた……………」と

悠「その通りm(\_\_\_\_)m」

フェリ「ちゃんと確認しないからですよー  
因みに今回のお話ではしつこいくらい出てるので多分大丈夫です  
ねー」

悠夜「では次お願い」

フェリ「はい えーとノアお姉さまからですねー」  
「代筆を頼まれた  
妹の反応を是非」

悠「これは……………再現Vを流すよ……………」

（再現VTR）



悠「なあ……」

妹「なに？」

悠「書いてくれ」

妹「何を？」

悠「小説……」

妹「お兄ちゃん……手術で頭がおかしくなった？」

悠「安心しろ。元からおかしい」

妹「自分で言うなあ!？」

悠「や、関西の血が……」

妹「私もお兄ちゃんもバリバリの関東人だよ!!」

悠「いつも心にハリセン……これ常識だよ？」

妹「知らないよ!!そんな常識!!」

悠「お前だつてノリが良いじゃん……」

妹「誰のせいだ!？」

悠「国？」

妹「おまえじゃぼけえ!!!？」

悠「という訳で書いてくれるかな？」

妹「いい も　　ってしまった!？」

悠「ふははは!!そのセリフを言った人間は断れないんだかな!  
」

妹「くっそー　タモさんめえ……!」

悠「てなわけで書け」

妹「後で何か奢ってよ？」

悠「仕方ないな……じゃあお前が欲しかったイ　ローのサインボ  
ールを……」

妹「くれるの!？」

悠「俺が真似て書いてやる」

妹「この馬鹿兄がああ!？死ねええええ!?!」

看護師さん「いい加減に静かにして下さい!?!」

悠・妹

「「「めんなさいm(\_\_\_\_)m」」

〽回想終了〽

悠「こんな感じ」

悠夜・フェリ・すずか

「「「……………」」」

悠夜「何か凄い……」

フェリ「色んな意味で……」

すずか「てか芸人さん？」

悠「そんなに褒めるなよ……」

「「「褒めとらん!!」」」

すずか「そういえば今回も……」

悠「代筆だね（．．）b」

悠夜「結局……仲が良いのか？」

悠「憎しみあつてはいないね！」

すずか「ちゃんとお礼しなよ？」

悠「さてお時間が来たようなので今回はこれでお開きに……」

妹「ふざけんなああ！！？」

悠「ちよっ！！お前は出てくるな！？」

妹「誰がこれを書いてると思ってるのよ！-！」

悠「ミ キー？」

妹「やあ！僕はミ キーマウスだよ    って違う!？」

悠「じゃあ、あれだ！ダックソン三世!！」

妹「知らんわ!?!いいからサインを寄越せえ!！」

悠「ちい!?!簡単には捕まらんよ!?!…………… って動けん!?!何故だ!?!」

妹「良いことを教えてあげるよ……………お兄ちゃんはまだ動ける訳ないでしょ!?!    ばーか!?!」

悠「し、しまったあああ!?!?」

悠夜「……………では今回のラジオはこの辺で終わりにしたいと思います……………」

フェリ「わたしのコーナーが滅茶苦茶ですうゝ（ノ　>。　）。。。」

すずか「何か質問でもまたは無茶ぶりも出来る限りの答えます　多分……………」

悠夜「ではまた……………」

フェリ「解散です　……………」



## 第10話（前書き）

クロノのキャラ崩壊が（笑）

クロノファンの方には誤っておきます！！

## 第10話

時空管理局本局へ訓練室

「こっち（海）で模擬戦は久し振りだね。クロノ君？」

「そうですね。最近はずっと地上勤めでしたからね」

「とっちらで……………」

「……………」はい」

「これはどういう事かな？」

「……………すみません。母さ……………リンディ提督とエイミィが…  
…」

「もついいよ…………  
諦める……………」

只今、悠夜とクロノは時空管理局本局の訓練室で約束していた  
模擬戦を始めるつもりだったのだが……

”悠夜君頑張って〜！！”

”おい！！しっかりと録っておけ！今日のニュースに間に合わせ  
るぞ！！”

と何処からか聞きつけたのか悠夜ファンの管理局員や何故か報道の腕章を付けた撮影スタッフの姿まである。

「……………」

「……………」

その数は既に訓練室に入りきらなくなる程だ。

「出来ればこんな状況で模擬戦はしたくないんだけど……………」

「悠夜さんはまだ良いですよ…… 僕は負けるのが前提ですよ？  
万が一にも悠夜さんに怪我でもさせたら明日から出歩けなくな

ります」

「それはいくらなんでも……………って」

悠夜はクロノのあまりにも悲痛な表情を見て何も言えなくなっ  
てしまった……

「いけえ　クロノなんてひねりつぶせー」

「悠夜くん　十秒ですよ」

「……………あいつらは……………」

「もしかして僕って嫌われてます……?」

「それは……」

”クロノ引っ込めー!”

”クロノ邪魔ー!”

”むつつりホモヤロー!”

「ちょっと待て!?! 僕はホモなんかじゃないぞ!?! 決して違うんだから!?!」

野次にキレ大騒ぎするクロノ……

「へー……………」

それに対して冷やかな視線を送る悠夜。

「ち、違いますよ!？」

僕は決して悠夜さんをそんな眼で見ません!！」

”嘘だー！ この前、悠夜執務官の写真をニヤニヤ眺めてたくせにー!!！”

”クロノ死ね!!悠夜様をそんな汚い視線で見るな!!！”

「……………」

「ち、ち違いますよ!?　ぼ、僕はそんなつもりじゃ「クロノ君」は、はい!」

「模擬戦……始めよ……」

「っ!!!?」

クロノは悠夜から漂う異様な気配に何も言えなくなってしまった。

「レイジングハート……」



『All Right , Standby ready set  
up』

悠夜の体を光りが包み込みバリアジャケットを展開させる。

「さてと……  
覚悟は良いかな……」

「ちよっ！？ 待って下さい！ S2U！」

あわててクロノがデバイスを起動させる。

「まさかクロノ君がそんなだったとは知らなかったよ……」

「いえ！！ だから違うんです！ ぼつ、僕は純粹に……」

” 嘘くさいぞクロノ！！ ”

” リンデイ茶なんか飲んでるからそうなるのよ！！ ”

「ぶーぶー それとマスターより背が低いぞー」

「フェリちゃんそれは関係ないよ？ まあ、本当だけど……」

「そこの外野！！ 僕をこれ以上陥れるのは辞めろ！！ それと僕は母さんのお茶は飲んでないからな！？」

周囲の野次にまたしてもキレるクロノ。

「はあ……」

クロノ君さいい加減に冷静になりなよ……  
執務官補佐でしょ？

いずれは補佐じゃなくなるしちよつとした事で掻き乱されてる  
ようだと仕事にならないよ？」

「はっ！？ いえ僕はずっと悠夜さんと……」

「え……？ もしかしてクロノ君………本当に？」

先程とはまた違う沈黙が流れる……

「はっ！？ い、いえ違ってます！！ 僕はそんなつもりじゃ……」

『はい！ クロノ君がさらっとカミングアウトした所で模擬戦を始めようか』

そんな空間を打ち破ったのは……

「エイミイ！！ カミングアウトってどういう事だ！！ それに何でこんな大事になってるんだ！？」

そこに映像通信で現れたのはクロノと同じく悠夜の補佐を担当するエイミイ執務官補佐だった。

『何って悠夜執務官殿への熱い告白だよ』  
それに許可ならリンディ提督や諸々の人達もオツケーしてくれたしねー』

「こゝここに告白だど?! だから僕はそんなじゃないと言  
ってるだろ!!?」

エイミイの口撃に顔を赤くして怒り狂うクロノ。

『むっつり君はほっとして悠夜執務官はどう思いますか?』

エイミイが悠夜の方に軽く片目を閉じてアイコンタクトを送って  
くる。

「まあ……僕はそんな事で人を差別とかはしないよ。ただ、  
クロノくんの気持ちには応えてあげる事はできないけどね……  
ごめんね……」

悠夜はエイミィの視線の意味を瞬時に読み取り、クロノ弄りに参戦する。

悠夜は芸能生活を転生前からしていたせいか空気を読むスキルと芸人の弄り方をマスターしていたのだっだ（笑）

『（悠夜くんナイス）クロノ君、残念！ フラレちゃったねー？』

「な！？ 悠夜さんまで！？」

悠夜の言葉に今度は顔が真っ青になるクロノ。

「さて……もうおふざけもこれくらいにしとこうか？ リンデイ提督も黙って見てないで停めて下さいよ……」

悠夜がそう話すと目の前にリンデイが映った映像が現れる。

『あらー ばれてた?』

「こんな面白い事に貴方が見てない筈がありませんよ。 それで  
もう良いですか?」

『ええ! 映像も押さえたしもう良いわよ  
それにしてもクロノが……ふ、ふふふ』

「……………(敢えて何も言わないでおう)」

激昂してエイミィ(映像)に詰め寄るクロノとそれを爆笑……  
微笑みながら見つめているリンデイ(映像)を見て悠夜は考える事  
をやめた。

しばらくしてようやく落ち着いたクロノと模擬戦を始める。

「落ち着いた？」

「……………ええ。『ご迷惑をかけました……………母さんが……………』」

「地が出てるよ？」

「じゃあ、今度こそはじめよう」

「はい！ では行きますー！」

そう言つとクロノは悠夜に向かって突っ込んで行つた。



「（最初から突っ込むなんてクロノくんらしくないね……なら）  
レイジングハート！」

『Accel shooter』

悠夜はレイジングハートを構えると魔力スフィアをいくつも展開させる。

「よし。シュート」

悠夜がクロノに杖を向けると創りだした約半分のスフィアがクロノに向かっていく。

「くっ!？」

それをクロノは何とか避ける。

「ここは避けるより防ぐべきだったね。アクセル！」

悠夜のその言葉と共にクロノが後方に避けたスフィアがクロノに向かってさらに加速しながら向かう。

「くっ！！ 誘導弾か！50以上のスフィアの精密コントロールなんて！？」

「ほらほらまだまだ行くよ！ レイジングハート！」

『All Right・Explosion』

悠夜の言葉に反応して魔力スフィアが一斉に爆発する。

「さて、クロノくんは……耐えたみたいだね」

悠夜の言葉通りに爆発の煙が晴れた所にはクロノが魔力障壁を展開している姿が見える。

「はあ……はあ……はあ！ スフィアを展開して爆発なんて非道いですよ！

もう少しでアウトでしたよ！」

「耐えたから良いじゃない。それに魔力もクロノくんに併せてセーブしてるしスキルも使ってないよ？」

模擬戦を始めるにあたって幾つか決めごととしていたのだが、今回は各メディアの目があることから余りレアスキルや魔力変換資質の使用は無しとなっている他に悠夜の魔力もクロノに併せてセーブしている。

「無茶いわないで下さいよ。 悠夜さんはそれくらいの制約は関係ないじゃないですか！」

「じゃあ降参する？」

「いえ……」

僕にも意地がありますから…… スティンガースナイプ！」

クロノは魔力スフィアを悠夜に向かって放つ。

「誘導弾か……」

なら打ち落とす！

レイジングハート！ デイバインバスターverバレット！」

『shoots』

悠夜はそれに対して幾つもの砲撃でスフィアを打ち落とす。

デイベインバスターverバレット……悠夜が編みだしたデイベインバスターのバリエーションの1つで威力とチャージを短縮して連射が可能な砲撃である。

似た魔法にショートバスターがあるが、それよりも威力とチャージも優秀なのだが魔力の消費が通常の砲撃魔法よりも激しいのが難点だ。

「くっ！ さすがは悠夜さんだ……不意をついたのに全部打ち落とされるなんて……でも！ こっちはチャージが終わった！  
S2U！ ブレイズキャノンー！」

『Blaze Cannon・Fire』

クロノの足元にミッド式の魔法陣が現れ杖の先から強烈な砲撃が放たれる。

「レイジングハート……準備は出来た？」

『It is preparation completion.  
It is possible to go at any time.  
(準備完了です。いつでもいけます。)』

悠夜の問いかけに応えるレイジングハート。

「よし。ありがとう……じゃあ終わりにしよう！  
天空より集いし 無限の流星よ。嘆きの寄る辺は天地の狭間 その  
開闢は終焉と知れ……メテオリック・レイディエーション！」

『M e t e o r i c      r e d i a t i o n』

悠夜の足元に巨大な魔法陣が出現して天空より幾つもの巨大な砲撃が放たれる。

それはクロノの砲撃を簡単に打ち消し次々とクロノに直撃していく。

直撃と同時に強烈な爆音と閃光が響きしばらく経って消えて後には気絶しているクロノだけが残された。

「ふむ。威力は中々だね。チャージに時間がかかりすぎるのが難点だけど……砲撃としては最高クラスの威力になるかな？」

『C o n g r a t u l a t i o n M a s t e r 』

「ありがとうレイジングハート。後はゆっくり休んで良いよ?」

『T h a n k y o u , G o o d b y 』

「ふー さてと、後は……」

悠夜はバリアジャケットを解除して一息をつくと……

” キアアアア!! 悠夜くんカッコ良いー ”

” 流石は天才だぜ!! 変態を簡単に片付けたぜ ”

” よし!!! いい画が録れたぞ!! 今日のニュースは悠夜執務官



の魔法特集にクロノ執務官補佐の熱烈大告白も3秒で振られる!!”

「……………さて、クロノくんを医務室に連れて行くか。エイミィこの場の收拾よろしく」

悠夜は観客の騒音を意図的に聞き流しエイミィに話しかける。

『はいはい　後はエイミィさんにおまかせー  
悠夜くんはクロノくんをよろしくねー』

「地が出るよエイミィーまあ、良いけど……  
じゃあフェリとシュレリア、医務室に行くよ?」

「クロノは弱つちいですねー　まあ、マスターが強すぎるだけ  
なんですけどねー」

「フェリ……それは言い過ぎだと思っわよ？  
本当だから余計に悪いよ……」

「シュレリアも何気に毒を吐きますねー  
変態さんには丁度いいと思うのですよー？」

「まあ、悠夜くんに色目を使ってるし確かに変態だよね……」

「です〜」

「おい！ 2人ともさっさと行くよ〜」

「わわ！ 待つて欲しいのですよ〜」

「ごめんなさい。悠夜くんいま行きますー！」

そう言ってクロノを担いで医務室に向かう悠夜を追う2人なの  
だった。

今回の模擬戦の結果。

悠夜＞新型デバイスのテストと魔法のチェック＜

クロノ＞変態の烙印（笑）＜

クロノ……………ドンマイ！！

「時空管理局本局・医務室」

「う、うう……」

ひ、光りが光りが僕を……はっ……!」

「クロノくん起きた？」

うなされたけど身体は大丈夫？」

「は……え？　悠夜さん？　あ、だ……大丈夫です!」

悠夜の問いかけに慌てて答えるクロノ。

「ん？　反応が鈍いね。　気絶してたから頭の回転が遅くなっ

てるのかな……  
ちよつと失礼するよ?」

そう言つと悠夜はクロノの容態をチェックしようと顔を近づける。

「わ、わわわ!?! ゆ、ゆう、悠夜さん!?!  
自分は大丈夫ですからそんなに顔を近づけないで下さい／＼／＼」

「? あれ? バイタルが上がった? 急激に体温も上がってるみたいだし……んゝ これは検査のやり直しが必要かなー」

目まぐるしく容態の変化を知らせる医療器具を見て考えだす悠夜。元々、医療免許を取得していた事や学者気質な所があるからクロノの心理に気付かない。

鈍くはないが時々、天然を発揮する悠夜だった。

「さてと、クロノくんも落ち着いたみたいだけど…… 本当に大丈夫？」

「はい。もう大丈夫……って君たち何をしている？ それだと悠夜さんと話しが出来ないじゃないか！」

クロノの目の前には悠夜を護るようにフェリとシュレリアが立ちだかっていた。

「マスターを変態から護るのです！」

「恋愛は個人の自由だけど、悠夜くんにフラグは建てさせませんよ？」

「なっ！！？」

フェリとシュレリアの弾圧に顔を真っ赤にさせるクロノ。

「ほらほら見てくださいマスター？ マスターを見てあんなに顔を真っ赤にさせてるです！？」

「うーん ギャルゲのヒロインならともかく野郎の頬染めは気持ち悪い……」

悠夜くん？ あれクビにしない？」

「違う！！ 僕はそんな意味で顔を赤くした訳じゃない！！ 怒ってるんだ！！ だいたい僕がホモとは何だ！？」

僕にはそんな嗜好はないし悠夜さんに対して持つてる想いは尊敬と憧れだ！！

それに気持ち悪いとは何だ？！ 僕の悠夜さんに対する想いを気持ち悪い。

だと！？ 許さんぞおまえら！！」

クロノが熱くいかに悠夜が素晴らしいかを語りだす。

だが正直……  
気持ち悪い……

結局、クロノが語り終えるまで数時間掛かった。  
話の内容は悠夜との出会いから始まり何故か『未来の僕と悠夜さん』に移行して話し終わったと思ったたらまた褒め称えるというループに突入した……

「……………」

「……………」

「……………」

話を延々と聞かされた3人は心底疲れた表情を浮かべてうな



だれていた……

「……………ねえ？フェリ、シュレリア？」

「はい………」

「……………何ですか？ 悠夜くん……………」

「クロノくんをからかうのも程々にして……………」  
頼むから……………」

「「はい……………」」

悠夜の懇願に2人は力なく頷くしかなかった……………」

「そういえば悠夜さん！最後の砲撃魔法っていつチャージしたんですか？」

あの威力を一瞬で溜めるのは悠夜さんでも無理じゃ……」

ようやく落ち着いたのかクロノが悠夜が最後に使った魔法について訊いてくる。

「あれ？ あれなら最初からだけど？」

「え！？ 悠夜さんがチャージしてる様子は見られませんでしたけど……？」

「ん？ それなら直接見た方が速いかな？  
フェリよろしく！」

「はい！ お任せですー」

フェリは悠夜の言葉に頷くと映像をだす。

「なるほど……」

最初のスフィアを媒体に発動させたのか……」

その映像に映っていたのは悠夜が最初に魔力スフィアを生み出してクロノに向かって発射してるシーンだ……

その時にクロノは気付かなかったが悠夜がクロノに向かって放ったのは生み出した半分で残りのスフィアはクロノに直撃した瞬間に天高くに放っている。

余りにも自然かつスピーディーに動いていたので気付いた観客も少なかったようだ。

「判った？」

でもあれってあんまり使い勝手が良くないんだよね……チャージに時間が掛かり過ぎるし、気付かれたら終わりだからね？」

「でもあの威力は凄いですよ…… 一発だけでも砲撃としてはお釣りが来ます……」

「まあ…… 試作だしね。改良の余地有りってとこかな？」

クロノが件の直撃を受けてるシーン見ながら青ざめながら話すのに対して苦笑いを浮かべて答える。

「それから怪我の治療はして置いたけど、念のためにもうしばらく休んでると良いよ」

そう言つと悠夜は医務室にあるデスクに向かう。

「もしかして悠夜さんが見てくれたんですか？」

「ん？ そうだよ？ 何故か医務官みたいな事もやらされてるし……」

よく見ると悠夜は執務官の制服の上に白衣を羽織っている。

「クロノには勿体ないんですけどねー  
いちいちマスターの手を煩わさないことですよー？」

「悠夜さんの治療の日が入ると怪我人が増えるんですよ……」

悠夜は基本的に苦手な魔法は無いが治療系の魔法には特に強みを持っていて以前に局員一同に土下座で頼まれ時々、悠夜が医務室に勤める事になった。

因みに悠夜が医務室にいる時は怪我人や病人が増えてしまう事が最近の悩みで、似たような事が研究スタッフの間でも始まりそうらしい……

「さてと、僕はこれからちょっと人と会う予定があるから少し出るよ？」

フェリは僕とシュレリアは報告書の作成、クロノくんはしばらく休んでて？  
後でエイミィが来るから」

悠夜はそう言うつと白衣を脱ぐとロッカーにしまいフェリとシュレリアを伴い医務室から出ていった。

「流石は悠夜さんだ！！やっぱり素晴らしい……」

後に残されたクロノがやけにキラキラした目をしていたのは秘密だ……

N  
e  
x  
t  
  
S  
T  
O  
R  
Y

## 第10話（後書き）

♪JNSラジオ♪

妹「さあ！ 早速始めるわよ！」

悠夜・フェリ

「「おー」」

悠「て待てやこら！？」

妹「何よ？ そんなに騒ぐとまた怒られるよ？」

悠「それはどうでも良いわ！！ なんでまた出てるんだ！？ しかも最初から！」

妹「だって私の評判なかなかし♪ 手伝ってるし良いじゃん！」



悠「本編よりも人気ないかお前……」

妹「私の人気でこの作品は持つのよ!」

悠「うつせいやい……（、；、；）」

フェリ「ではオープニングもそこそこに今回の話を振り返りましょう」

今回は何といっても……」

悠夜「クロノくん……」

フェリ「まさかクロノが……だったとは」

悠「因みにボーイズラブな展開は絶対に無い！！  
だいたいクロノのキャラ崩壊はお前のネタだからな！？」

妹「だって弄ると面白いし！ それにお兄ちゃんもノリノリだった  
じゃん！」

悠「……………さて質問いくか？」

妹「誤魔化した……………」

悠夜「あれが大人が都合の悪くなった時の態度だよ？」

フェリ「汚いです」

悠「うつさい！！さっさとお手紙読む！！」

すずか「アリサちゃんみたい……………」

悠「誰がツンデレや！？　ってすずかさん居たんだ……」

すずか「最初から居たけど妹さんに邪魔されて出れなかったんだよ……」

妹「ナンノコトカナ？」

すずか「お仕置きかな……」

妹「ひ、ひいゝ？！

し、質問！！早く質問に行つて！？」

フェリ「仕方ありませんね」　では『教えてフェリ先生』　『このコーナーはこの番組に寄せられた質問や無茶ぶりを私が答えてフェリちゃん最高　ってなるコーナーです』

悠夜「相変わらずだね……」

フェリ「何の事ですか？では早速行きましょう

最初は鮮血の刻印様からですね　えっと『ヴィレイサー率いるカストロファイヴSなのは達管理局との対決の発端となるネタを提供して下さい！』……………え？」

悠「フェリ頑張れ！超頑張れ」

妹「フェリちゃんファイト」

悠夜「大変そうだねフェリ？」

すずか「逃げたね……フェリちゃん頑張つてね？」

フェリ「ええー！？ 私が答えるですか？！ 無理ですよー！？」

悠「だってフェリのコーナーだし」

悠夜・妹・すずか

「「こくこく！」「」」

フェリ「そんなあ……手伝って下さいよ」

悠夜「フェリ好感度UPだよ？」

フェリ「頑張ります！！」

………う  
ーん、お弁当に入ってる卵焼きの味付けが好みじゃなくてヴィレイ  
サー君とファイトさんが喧嘩なんてどうです！？」

全員

「「「何そのコメディ！！？」」「」」

フェリ「だ、駄目ですか！？ならば……………管理局の上層部の暴走はどうです！！」

悠「よくあるネタだね」

妹「まあ、一番無難だけど……………」

フェリ「む」ならば、民衆が管理局に激怒してそれを武力で抑える管理局とそれから護るヴィレイサー君達はどうです！！」

悠夜「それって暴走と一緒にだね？」

すずか「まあ、悪くは無いと思うけど……………」

フェリ「ならばならば！！ヴィレイサー君が突然、私は天に立つと

か言つとか……いきなりこしみの姿で踊りだすとか……」

悠夜「フェリー！？ 頭から煙が！？」

フェリ「むきゅ」

悠「フェリには無理だったか……ならば僕が少し考えよう……」

妹「珍しい」

悠「たまにはね……」

まずは前提条件としてスタンスの確定だね。勧善懲悪を決めるとやりやすいよね。この場合は管理局を悪、ヴィレ君達を正義にするのが一番簡単なんだけど。

その場合は管理局をとことん落としてフェリが言ってたようにするのが判りやすいね」

妹「他は？」

悠「後は勸善懲惡を決めないでどちらかが正しいかを良く判らなくさせる方法があるけど……」

すずか「けど……?」

悠「どっちもバランスよくなきゃいけないから描写が難しい……」

悠夜「確かに……」

じゃあ……結局、ネタは?」

悠「難しいねー」

このスタンスによってストーリーが変わるから。

徹底的に管理局と戦って肅正するなら管理局の残酷さを際立ててヴィレ君達に頑張って貰うか……

はたまた、どちらも正しくあり間違ってるスタンスにするか……  
うーん、しかしこうなるとなのは達とは完全に敵になるからなー  
よし!上層部に人質を取られて仕方なくにしよう!」

妹「うわ! 逃げた!?」



悠「王道といつてくれ!!」

悠夜「何だか中途半端になったけど作者とフェリにこれで限界みたいなのではないですか!!」

妹「だいたいお兄ちゃんも中途半端にあれなんだよ!!」

悠「何だと!? だったらお前が案だせやあ!!」

妹「ふざけるな!? 作者はお前じゃぼけえ!!」

悠夜「……………」

すずか「次の質問いこうか？」

悠夜「何だか慣れてますね？」

すずか「そんなことはないよ? 次はカガヤ様から『悠さんはボケで妹さんはツッコミでオーケー?』 そうだね! 間違っていないね」

悠・妹

「「ちょい待てや！！いつ決まったそんなの！？」」

すずか「最初から……だね」

悠「実は俺がツツコミなんだよ！！」

妹「嘘つくなボケ！！」

すずか「お笑い兄妹……」

悠・妹

「「何か言った！？」」

すずか「次はノアちゃんだね？」  
「2人はシスコン、ブラコンです  
そうだね 間違いないよ！」

悠・妹

「「ざけんな!!」」

すずか「ほら仲良し」

悠・妹

「「ぐっ!!」」?

悠「お前真似すんな!!」

妹「お兄ちゃんこそ私の真似しないで!!」

悠「やろうつてのか!」?

妹「やってやるわよ!!」

看護師さん

「また貴方達ですか!？」

いい加減にして下さい!-!」

悠・妹

「「ごめんなさいm(\_\_\_\_)m」」

すずか「じゃあ今回はこれでお別れだね?」

悠夜「質問や無茶ぶりはフェリが応えるからよろしくね!」

すずか「では……」

悠夜・すずか

「「解散です!」」

看護師さん「だいたい貴方達はですね……」

「悠・妹  
もう

辞めてえ！！

私達のライフはもうゼロよ！？」  
「

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8650o/>

---

魔法少女リリカルなのは～Angel's singer

2011年6月12日11時48分発行